
魔法少女リリカルなのはDYNAMIC リメイク

リリカルZ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはDYNAMIC リメイク

【Nコード】

N0605T

【作者名】

リリカルZ

【あらすじ】

以前投稿した「リリカルなのはDYNAMIC」をパワーアップ&シナリオ完全一新して再度投稿してみました
前回とは話が違う面も多いかもしれませんがまあ温かい目でご覧下さい

物質転移（前書き）

やっちゃんいましたリメイクです
どっぞどっぞ覧下さい

物質転移

「さて、それじゃ始めようか」

研究室の中で弓教授の言葉が出た。眼鏡を掛けた白髪の中年の男性である。優しい顔立ちをした科学者を思わせる白衣を身に纏った男性が今、巨大な装置の前に立っていた。

「いよいよ始まるわね、人類初の物質転送の実験が」

「ああ、こうして目の前で見られたのは奇跡みたいなもんだぜ」

さやかという言葉に甲児ははしゃぎたてている。今日の前で起こっているのは人類初の試みである「物質転送」の実験である。分かりやすく言えばワープの実験である。

これが成功すれば目の前に置かれている一つの赤い球体は自分達の居る部屋から一つ離れた別の部屋に転送される予定なのだ。

物質転送。それは人類の長きに渡る夢の一つでもあった。光の速さで目的地に瞬時に辿り着く。もしそれが実現化すれば様々な可能性が起こるのだ。期待に胸を膨らませながら甲児が実験の成功を見守っていた。

「それでは実験を開始するよ。光子力エネルギー注入開始！」

弓教授の言葉が放たれる。それと同時に巨大なレバーが下に降ろされると装置に向かって激しい発光が起こる。物質転送には膨大なエネルギーが必要になる。其処で光子力研究所で研究をしている光子力を使用する事にしたのだ。微量で膨大なエネルギーを誇り、尚且つ無公害と言う正に夢のエネルギー「光子力」正に実験にはうってつけの存在であった。

やがて、エネルギーが注ぎ終わると今度は目の前の赤い球体に蒼白い閃光が放たれ球体を瞬時にその場から消したのであった。

「やった。成功だ！」

「お父様、結果は？」

甲児とさやかは大声を上げて喜ぶ。そんな二人を宥めるように弓教授は隣の部屋のモニターを移す。其処には確かに先ほど甲児達の部屋にあった赤い球体があったのだ。

「喜んでくれ。実験は成功だ」

「イヤッホー！すげえぜ！人類初のワープをこの目で見たぞお！」

「甲児君つたらはしゃぎ過ぎよお」

実験をこの目で見れた事に大いに喜ぶ甲児。それに呆れた顔をして見るさやかの姿があった。そして、そんな二人を微笑ましい顔で弓教授は見守っている。

今、甲児とさやかは19歳になっていた。

現在甲児はアメリカで大型宇宙船の開発をしている。さやかは光子力研究所で光子力の平和利用の為の研究に日夜奮闘しているのだ。そんな二人が今日こうして久しぶりに再会できたのである。

それは今回の実験の報せである。それを聞いた甲児はすぐさまアメリカから此処日本に飛んできたのだ。

全く、好奇心は相変わらずねえ。

さやかは内心そう思っていた。だが、同時に全く変わらない甲児を見てホッと安堵するのも事実であった。

だが、此処まで来るのに様々な事があった。

光子力と超合金Zを巡るDr・ヘルとの戦い。遙か昔から蘇ったミケーネ帝国との激闘。そして、甲児が巻き込まれたベガ星連合軍との激闘。他にも様々な戦いがあった。

だが、その戦いの後にはこの二文字が彼等の前にあった。

『平和』

この文字である。彼等若い命のお陰でこうして平和な日々が訪れたのである。

「さて、後は実験の結果を調査してすぐに第2段階のテストを行おう。」

「それって、もしかして今度は人を使った実験ですか？」

甲児の問いに弓教授は頷く。それを聞いた途端甲児の目が輝く。まるで少年その物である。

「弓教授！是非その実験を僕にやらせて下さい」

「ちよつと、何言い出すのよ甲児君！」

甲児の手を取ってさやかが止めようとする。だが甲児はそれでは引き下らない。グイグイと弓教授の前に躍り出る。それには流石の弓教授も半ばたじろぐ。

「ま、まあ構わないが・・・実験は明日だが構わないかい？」

「勿論です！ヤッホー！楽しみだなあ」

「もう、子供なんだからあ」

甲児のはしゃぎように呆れ果てるさやかではあったが、同時に少しだが自身も興味があつた。

こんな事なら自分も立候補すれば良かったかな？そう思えたのだ。

「甲児君、今日は研究所に泊まって、明日朝から実験をするとしよ

う」

「有難う御座います」

甲児は頭を下げる。すると、隣でさやかが軽く甲児を小突く。それに気づいた甲児が振り向く。

「何だい？さやかさん」

「折角日本に来たんだからシローちゃんに会ったら？」

さやかが名前を出す。兜シロー。甲児の弟であり彼の唯一の家族なのだ。過去の事故で両親を失い、大切な祖父もDr・ヘルにより殺され身寄りを無くした二人は弓教授の元で過ごした事があるのだ。そして、シローも今では中学生になっている筈である。

「そうだな。アイツの成長した姿も見てみたいしな」

「フフツ、それじゃ今から会いに行く？」

意地悪く笑いながらさやかが聞く。勿論それは甲児の答えを知つての事での笑顔である。

「そうだな、アイツも忙しいだろうし明日の実験が終わった後にも顔を出せば良いや」

「そっか、それじゃ今から暇なのね」

「ま、そうなるかな」

甲児が後ろに手を回してそう呟く。事実甲児は暫くの間日本に居る事になっている。何も無理して今会いに行く必要もないのだ。

明日の実験が終わった後にもゆっくり会って一緒に飯を食べれば良いだろう。そう思っていたのだ。

その日の夜、甲児は研究所内にある休憩室で休んでいた。

その時甲児は妙な夢を見ていた。

それは、まるでSF映画の世界のような近未来の都市の中を巨大な怪物が闊歩している光景である。

そして、更に驚いたのは、そんな怪物に数人の少年少女が挑んでいる光景であった。

まるで何処かの舞台衣装の様な格好をした少年少女が杖のような物を振り翳して光の粒子を放ち怪物に攻撃を仕掛けている。

だが、怪物には全く効いていないらしくそのまま破壊活動が続けている。

（何だ？この夢は）

見ている甲児自身も疑問に思えた。一体何でこんな夢を見るんだ？
そもそも普通の人間、まして10代から20代手前の若者が20mを越す怪物に素で挑むなど自殺行為に等しい行為なのだ。

第一、その世界では軍隊は無いのだろうか？そして、彼女達が持っている杖らしき物は一体何なのだろうか？

夢なのに疑問が尽きない。

だが、そう思っている時に限って夢とは覚めてしまう物である。

「まったく、変な夢を見たもんだぜ」

柄にも無く妙な夢を見た自分に含み笑いを浮かべる甲児はそのままさっさと再び深い眠りに付いた。

それから時間は経過し、翌朝になった。

場所は以前実験が行われた場所である。

そして今度はその装置の中の椅子に甲児が座っている。

手足を拘束具で固定され頭には様々な機材のついた装置が被せられていた。

「それじゃ準備は良いかい？甲児君」

「何時でも良いですよ」

弓教授の言葉に甲児は頷く。

それを見た弓教授が装置のレバーを倒す。装置がそれに連動して起動しゴウンゴウンと機械音を立てる。

やがて振動がこちらにまで伝わってきた。

いよいよだ、いよいよ初のワープを体感出来る。

期待に甲児の胸が膨らんだ。

だが、その時であった。

突如甲児の周囲を激しいスパークが襲ったのだ。

それには弓教授やさやかは勿論、他の研究員達も驚いている。

「何事だ！」

「分かりません！原因不明です」

研究員の悲鳴が響く。

完全に予想外の出来事である。

「実験は中止だ！直ちに全ての電源を切るんだ」

「駄目です！全く応答しません！完全に暴走しています」

「何だと」

弓教授は青ざめた。そしてその顔のまま装置の中に居る甲児を見た。装置は暴走、甲児はスパークの中拘束されていて身動きがとれない。このままでは甲児は何処に飛ばされるか分からないのだ。

「甲児くん！」

「さやか！」

しかし、そんな中危険を顧みずさやかが甲児の元へ走り寄ったのだ。

「さやか！危険だ、戻りなさい！」

「甲児君！今拘束具を外すわ！」

さやかがスパークを切り抜けて甲児の前にやってきた。

そして甲児の手足を拘束している拘束具を外そうとしていた。

「さやかさん！無茶だ！早く離れるんだ」

「何言ってるのよ！甲児君を放つては行けないわ」

そう言ってるさやかの目にはうつすらとだが潤んでいるのが見えた。助けたい。そんな思いがさやかの中にあるのだ。

数年と言う短い付き合いではあったが甲児とさやかは立派なパートナーとなったのだ。

そんな大事なパートナーを失いたくない。

それがさやかの思いだったのだ。

だが、そんな二人を飲み込むかのようにスパークは激しくなり、やがてそれは閃光となって襲ってきた。

「うー！」

「わ！」

閃光に弓教授や研究員達は思わず目を瞑った。

閃光が止み、目を開けてみると、其処には誰も居なくなつた装置だけが取り残されていた。

「甲児くん・・・さやか・・・」

二人の居なくなつた装置の前で、弓教授は一人そう呟くのであつた。

異世界

1

無数の光の粒子が目の前に現れては消えていく。

まるで星の海の中を泳いでいるような感覚を甲児は感じていた。

その中では方向など無かった。

嫌、方向どころか今自分が飛んでいるのか落ちているのかさえ理解出来ずに居た。

上も下も右も左も全てが同じ光景なのだ。

一体自分は何処へ向かっているのだろうか？そして何時までこの様な光景が続くのだろうか。

「ん・・・じくん・・・甲児くん！」

ふと、声が聞こえた。

さやかの声である。

そう言えばさやかも巻き込まれたのだ。

一体さやかは何処に居るのか？辺りを見回すも何処にも姿は見られない。

「さやかさん！何処だ？何処に居るんだ！」

甲児は力一杯叫んだ。

どうか返事をして欲しい。そう思いながらも力一杯叫んだのだ。

「どうしたの？私なら目の前に居るわよ？」

だが、返ってきたのは以外な返答であった。

え？目の前に居るだつて？

辺りを見回すがその姿は一向に確認出来ないでいる。

姿を見つけれないのに甲児は徐々に焦りを募らせていく。

だが、そんな甲児の目の前を眩い光が覆いだした。余りの眩しさに甲児は思わず目を瞑った。

目覚めた甲児はうつすらと目蓋を開いた。

其処には目を潤ませてこちらを見るさやかの姿があつた。

「さ、さやかさん・・・無事だったのかい？」

「ええ、私は無事よ。それにしても一体どうしたの？いきなり大声で叫ぶからビックリしちゃったわ」

さやかの言葉に甲児はハツとした。どうやら先ほどの光景は夢の中だったらしい。

だとしたら自分は相当恥ずかしい事をした事になる。

唯一幸いだったのはそれを聞かれたのがさやかだけだと言う事だった。

「ところで、此処は何処なんだ？」

「分からないわ。でも・・・」

さやかは言葉を区切つて指差した。

其処には文明の証である高層ビルが立ち並ぶ光景が見えた。どうやら自分達はその市街の外れにある森林に居るらしい。

「文明はあるみたいね」

「だな、どうやらこれで多少の生活には困らないね」

甲児はそう呟いた。

もし飛ばされた場所が何もないジャングルとかであつたら本当に困つていた筈である。

其処へ行くとこうして文明を発見出来たのは正直有り難かつた。

「でも、何だか見た事ない建物だな？」

「そうね、あんな作りの建物なんて私始めて見るわ」

甲児とさやかはお互いに見合つてそう呟いた。

確かに初めて見るつくりの建物が殆どである。

そのどれもが何処か近未来的な作りなのだ。

「もしかしてあれかな？俺達未来の地球に来たのか？」

「へえ、もしかしたら未来の甲児君に会えたりしてね」

「ははは、ひょっとしてそいつは俺の子供だったりしてな」

何時になく軽口を叩く二人だ。

だが、それはお互いこうして近くに居られればこそ出来る事なのだ。

「とにかく、此処で問答しても始まらないや。人が居るみたいだし降りてみようぜ」

「そうね」

二人はそう言つて森林の中を歩きながら目の前に映るビル街に向かつて歩いていくのであつた。

町に辿り着くといよいよ近未来を思わせる作りが所かしこに存在していた。

まるでSF映画の世界にそのまま入り込んだ錯覚を二人は感じていた。

「こりゃ・・・いよいよSFの世界だなあ」

甲児が思わずそう呟いた。それにさやかも同様に頷く。

明らかに甲児達の居る世界でも時代でもないのが頷けた。しかしそんな場所に来ると甲児は俄然興味が沸いてきた。

元々科学者の道を進んでいる甲児はこの様な場所で目を輝かせているのだ。

そんな甲児を見てさやかは思わず含み笑いを浮かべた。

幾つになっても甲児くんは甲児くんなんだなあ。

そう思うと甲児に対し笑いがこみ上げてくると同時に何処か安心感を感じた。

甲児とさやかの関係はあの時、3年前に初めて会った時以来余り進展していない。

喧嘩友達と言った関係から余り進展してないのだ。

だが、さやかも甲児が決して嫌いな訳ではない。それこそ甲児から求められれば心を開いてしまうだろう。

そんな自分が安易に想像出来た。しかし、結局自分は甲児とどうなりたいのか、それは未だに悩みの種であった。

しかしそんな当の甲児はと言うと。

「うわぁ・・・こりやすげえ！さやかさん見てみるよ！」

これである。まるで子供の様に甲児ははしゃいでいた。そんな甲児の目の前には何もない場所からモニターが現れているのだ。

映し出されているのはどうやらこの辺りの地図のようである。だが、それを見ても二人には此処が何処なのか全く分からないのであった。

「それにしても、これ見た事無い文字ねえ・・・ねえ甲児くん」

「ああ、それにしてもこれ一体どうやって映ってるんだ？すげえ気になるよ」

甲児はさやかの話半分聞いて半分聞き流していると言う状況であった。今の甲児には目の前にある摩訶不思議な物に夢中なのだ。気のせいか回りの視線が甲児に向けられている。

町行く人々にとっては極当たり前な物に興味をそそられている甲児がとても不思議に見えるのだろう。

心なしかさやかはその視線が痛かった。

「こ、甲児くん・・・早く行きましょう」

「ちよ、ちよっと待ってくれよさやかさん！もう少しだけ・・・」
「良いから！」

ぐずる甲児の襟首を掴んでさやかは足早にその場を去る。甲児は未だに手を伸ばしてそれにすがろうとするが後の祭りであった。

そのままずると引つ張られていく甲児。側から見ると面白い光景であった。そのせいか今でも付近の人々の視線を釘付けにしていた。

「ったくよお、ひでえよさやかさん。ああ言うのって凄い気になる

んだぜえ」

「はいはい、どうでも良いけど回りの目も気にしてよね」

呆れ口調でさやかは言う。

それに甲児は生返事で答えるのであった。

「それで、此処が何処だか分かったの？」

「それが全然分からないんだ。何しろ文字が見た事ない形だから解読にしようもないんだよ」

「それつてもうお手上げて事？」

さやかの言葉に甲児は軽く頷く。どうやらそうらしい。

地図を見ても見た事が無い地区な為此処が何処なのかどの国なのかすら理解するのが出来ないのである。

「それで、これからどうするの？」

「とにかく何処か雨風を凌げる場所でも探そうぜ」

甲児はそう言つて辺りを見回す。が、何処を見てもそれらしき物が一向に見当たらない。と、言つのもやはり文字が読めない為に何の店なのか分からないのだ。

「参つたなあ・・・このままだと野宿するしかないかもなあ」

「ええゝ・・・嫌よそんなの。こんな町のと真ん中で寝るなんてみっともないじゃない」

甲児の提案に苦笑いで答えるさやか。

確かにそれは甲児も願ひ下げであった。

そんな時であつた。回りを歩いていた人々が突如血相を変えて逃げ出し始めた。

「な、何だ？」

「甲児くん！あれ」

さやかが指差す方には巨大なトカゲが居た。大きさからして2m弱はある。ところどころがサイボーグで強化されている。そして、更に驚いたのがそんな恐竜の前には二人の少年少女が居た。

年は二人共10代である。赤い髪の少年がピンク色の髪の少女を庇うように恐竜の前に居る。だが、このままでは少年が危ないのは火を見るより明らかであった。

「さやかさん！行くぞ」

「ええ！」

言うのと同じ速さで甲児は側に落ちていたパイプを手に取り恐竜に向かっていく。

「この野郎！トカゲの分際で人間様に逆らうたあ生意気だぞ！」

甲児が叫び恐竜の後ろからパイプを叩きつけた。だが、音と共にパイプがくの字に曲がってしまった。

くそお、何て固さだ！。

甲児の顔が歪む。

「甲児くん！退いて！」

その後ろからさやかが駆け寄る。手に何かを持っている。

それを思いきり恐竜に突きつけた。その直後、激しいスパークが起る。それを浴びた恐竜はその場で痙攣した後その場に倒れる。

だが、その後奇声を上げるもその後恐竜はそのまま甲児達から逃げ

去っていく。

甲児達はその恐竜を見送った後その場に居た二人に近づいた。

「大丈夫か？」

「は、はい！助かりました」

そう言う少年は緊張の糸が解れたかのようにその場に座り込んでしまった。それを見た甲児がそつと手を差し出す。

「女の子を守るなんて中々肝つ玉の据わった奴じゃねえか」

「あはは・・・無我夢中でしたもんで」

甲児の言葉に少年は頬を掻きながら恥ずかしそうに答える。そして甲児の手を借りてすつと立ち上がった。

「ところで、そっちの子は大丈夫か？」

甲児が先ほど少年が庇っていたピンク色の髪の少女の方を見る。その少女はどうやら甲児達を怖がっているのか少年の影に隠れてしまった。

「ありゃ？もしかして俺って怖いかなあ？」

「ご、御免なさい！この子はちよつと訳があるみたいで喋れないんです」

「喋れない？それって一体・・・」

甲児が訳を聞こうとした時であった。突如として巨大な地響きが起こった。

甲児は必然的に上を見上げる。其処には巨大な機械の怪物が立っていた。大きさは20mはある。

頭に巨大な鎌を取り付けたどくろの顔をした怪物であった。

「そんな！どうして機械獣がこんな所に・・・」

巨大な機械の怪物を見上げて甲児がそう言葉を発した。

3

「それじゃ、此処は地球じゃないってのか？」

甲児は少年にそれを聞いた。

現在甲児とさやかは先ほど助けた少年と少女達と共に狭い牢屋の中に入れられていた。

その中に入っているのは甲児達だけでは無かった。

中には子供から老人まで様々な人達が捕まっていた。

だが、彼等は甲児達とは決定的に違っている物があった。それは目の輝きである。

彼等には先ほど助けた少年の様な輝きが無いのだ。まるで死人のよう
に諦めた目をしている。

「そう言えばお互いまだ自己紹介してなかったな。こんな所でする
ものなんだけど・・・俺は兜甲児」

「私は弓さやかって言うわ。宜しくね」

甲児とさやかは自己紹介をした。

「僕はエリオ・モンディアルって言います。それで、彼女がキャラ・ル・ルシエって言います」

エリオは自身の名前と少女の名前も一緒に紹介した。

すると少女の背負っていたカバンがもぞもぞと動いたかと思うと中からトカゲのような物が顔を出した。

「うわぁ！またトカゲが出た！」

「ひっ！」

甲児が驚いて声を挙げたためにキャラも思わずビクツとしてしまった。

それを見て甲児はしまったと言った顔をした。

「ご、御免・・・おどかすつもりはなかったんだ」

「あ、気にしないで下さい。それとこれはトカゲじゃないみたいですよ。名前はフリードリヒと言って竜の子供なんです」

そんな甲児にエリオが謝罪と説明を織り交ぜる。
だが、それを聞いた甲児は驚いた。

「り、竜だってえ！とことんファンタジーな世界だなあ・・・にしても、何で君はそんなに知ってるんだい？」

「えっと・・・さっきこの子に教えてもらったんです」

「え？でもさっきこの子喋れないって」

さやかが当然と言った感じの言葉を言う。するとエリオがまた説明をした。

「あ、それは彼女が僕に念話をして教えてくれるんです」

「念話？なんだいそれは？」

「思念通話と言いまして・・・分かりやすく言うと・・・ええと」

「それってもしかしてテレパシーの類なのかい？」

「そ、そんな感じです」

甲児の言い分にエリオは頷いた。

「なあ、その念話って俺達にも聞けるのか？」

「いえ、残念ですけど、それを聞くにはリンカーコアを持った人だけなんです」

リンカーコア？また聞きなれない単語が出てきたなあ。

内心そう思いながら甲児は聞いていた。そしてそれについて聞こうとした時であった。甲児達の入っていた牢屋に向かって黒い棒を持った小太りの男と2mはある巨大な人型のロボットが扉の前に立った。

男は扉を開き甲児達の前に出る。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

男は甲児達に対して何か言っているのだが甲児には聞きなれない言葉の為全く言っている意味が分からない。

「なあ、何て言ってるんだ？」

「甲児さんとさやかさんの二人着ている服が変わってるから出ろって言ってます」

エリオが説明する。

どうやら目的は俺達みたいだな。

そうとなると下手に事を荒立てれば中に居るエリオとキャロが危ない。此処は言うとおりにすべきであろう。そう思った甲児とさやかは立ち上がった。

「こ、甲児さん！まさか行くつもりですか？」

「まあな、このまま此処に居たら何されるか分かんないしな」

「でも、行ったらきつと殺されてしまいますよ！」

エリオが甲児の服を掴んで止めようとする。だが、そんなエリオの肩を甲児は両手でそつと掴んだ。

「心配すんな。別に死に行く訳じゃねえよ。必ず助けに来るからそれまで無事で待ってるよ」

「甲児さん・・・」

エリオが未だに心配そうな顔をしている。すると後ろで男が鉄格子を棒で叩きながら口やかましく叫んでいる。

これ以上長引かせると流石に危なそうである。

甲児とさやかは未だに心配な顔で見つめるエリオとキャロを置いて牢屋の外に出ると男とロボットに連れられて薄暗い廊下を歩いていく事になった。

暫く廊下を歩いている時であった。

甲児とさやかは静かに耳打ちしながら歩いていた。

「なあ、さっきトカゲで使ったのって・・・あれスタンガンだよなあ」

「ええ、この間研究所の夜間勤務の手伝いの際に借りてただけどそのまま持ってたみたいなの。まだ1回分残ってるわ・・・使うの？」

「ああ、恐らく使う機会は今しかない。これ以上減る事はないだろうし、増えたらもうお仕舞いだ。だとして今しかない」

会話を終えた二人がそつと距離を開ける。すると男がなにやら気になったのだろうか二人の方を向いて喧しく叫んだ。

まさにその時であった。甲児は咄嗟に距離を詰めて男の鳩尾に拳を叩きつけた。

かなりの力で叩きつけられたのだろう。男の体はくの字に曲がり口からは嘔吐物を吐き出す。そのまま甲児は男を吹き飛ばす。するとロボットも異変に気づいて甲児達の方を向いた。

「遅いんだよお！」

だが、その時には甲児は男の持っていた棒をもぎ取りロボットの胴体目掛けて殴りつけた。

回りは頑強な鉄板で覆われていたが胴体、特に腹辺りはガラスケースで覆われているのみであった為呆気なく割れた。其処へすかさずさやかがスタンガンを持ってロボットの腹に突きつけた。激しいスパークが起こりロボットの体を電流が走る。

やがてロボットからは黒い煙が上がりそのままドウと仰向けに倒れて動かなくなってしまった。

「よし、今の内にエリオ達を助けよう」

「ええ！」

甲児はさやかにそう言って先ほど殴り倒した男の体から牢屋の鍵を盗み取った。

何束も鍵が連なった形の古い型だった。

「これだな」

甲児はそれを持って立ち上がり急いで来た道に戻ろうとした。だが、其処にはあの時甲児とさやかか追いつた恐竜の化け物が居た。

それも一体ではない。5体・・・嫌、後ろからも来たのをあわせる
と10体は居る。

完全に取り囲まれてしまった。

恐竜達が口から汚い唾液をたらしながらゆつくりと甲児達との距離
を詰めて来た。

今甲児の手元には短い棒一本しかない。しかもスタンガンは先ほどの
一発で完全にバッテリー切れを起こしてしまい最早使い物になら
ない状態にある。

「か、囲まれた」

「くそ！此処まで来て諦めて溜まるか！」

甲児は叫び手近に居た一体に棒を叩きつけた。

だが、それよりも早く恐竜の尾の攻撃が甲児の腹に直撃した。

「ぐっ！」

苦痛の声を挙げて甲児は倒れる。その上に恐竜が飛び乗り鋭い牙の
ついた口を大きく開いた。

このまま甲児の喉元に食らいつくつもりなのだろう。

必死の抵抗を試みようとしたが両手を足で踏まれている為に身動き
が取れないでいた。

正に絶体絶命かと思われたその時であった。

一瞬、正に一瞬の出来事であった。一瞬の内に甲児の目の前に居た

恐竜の首がポロリと落ちてしまった。

そして倒れてきた恐竜の胴体を横に転がして倒した。

そのまま甲児は立ち上がった。すると立って見ると周りに居た恐竜も既にズタズタに切り刻まれていた。

そして、甲児の視界の前には一人の女性が立っていた。

黒い制服を着てその上に白いコートを羽織った金髪の女性だ。

瞳の色は澄んだ赤い色をしている。年は甲児と同じ位に見える。顔立ちはとても美しい女性である。

そんな女性が甲児の方を見た。

「大丈夫ですか？何処か怪我は・・・」

「あ、ああ・・・怪我は無いから大丈夫だ。にしても、これはあんながやったのか？」

甲児が回りの倒れた恐竜を見てそう尋ねた。だが、それに対して女性はいくばかりを振った。

「いえ、私だけではありません」

「え？じゃあ一体誰が・・・」

「それは私だ」

うわ！何時の間に居たんだ！

思わず後ろから声がしたのに甲児は驚いた。

振り返ると其処にも女性が一人居た。

ピンク色の長い髪を後ろに束ねたポニーテールの女性だ。

見るからに西洋の騎士を思わせる格好をしており瞳の色はブルーの色をしている。

また、こちらの女性も綺麗な顔立ちの女性である。

「しかし、お前の様な奴が騎士カリムの予言した時空の彼方より来たりし者なのか？余り強そうには見えないが」

女性が甲児を見て不満そうな顔をした。

「あ、あんたら一体何者なんだ？」

「説明は後です。とにかく私達と一緒に来て下さい」

「ま、待って！まだ牢屋に人が捕まってるの。あの人達を助けないと！」

「無理だ、急いで此処を離れないと奴等が出てくる。そうならば我々では手に負えない」

さやかの言葉をポニーテールの女性が拒否した。

「でも・・・それじゃエリオ君達が」

「え！エリオが此処に捕まってるんですか？」

さやかの言葉を聞いて金髪の女性が驚いた顔をした。

「何だ？あんたエリオ達の事と何か関係あるのか？」

「はい・・・実は・・・」

「テストロッサ。今は問答をしてる場合じゃないぞ。早く聖王教会に向かった方が良い」

「う・・・うん」

ポニーテールの女性の言葉を受けてテストロッサと呼ばれた女性は暗い顔をしつつも頷く。

さやかは喉まで出かかった反論の言葉を放とうとしたが、それを甲児が止めた。

「さやかさん、今は彼女達の言う通りだ。今俺達が此処で捕まったらそれこそエリオ達を助けなくなってしまう。今は悔しいが逃げるしかない」

「う・・・うん・・・分かったわ」

甲児に言われてさやかは力なく頷いた。

「話は済んだな。ではさつさと行くぞ」

「行くつて、外に乗り物でも用意してあるのか？」

「まあな」

ポニーテールの女性は頷くと腰に挿してある刀をスラリと抜き放ち壁に向けて構える。

「壁を破るぞ。レヴァンティン！」

女性がそう叫ぶと壁に向かって一閃の如く抜き放った。その直後壁は音を立てて破壊されてしまった。

「す、すげえ・・・」

甲児は女性の凄さに言葉を失っていた。

「さあ、近くにヘリが待っている。急ぐぞ」

「急ぐつて言っただって・・・」

甲児は開けられた壁から外を見て見た。外からはかなりの高さが見えた。

恐らく此処から飛び降りれば即死は間違いない。

「しっかり捕まっつて下さいね」

そう言つて金髪の女性は甲児の手をグツと握る。
え？一体何をするつもりなんだ？

甲児には訳が分からなかった。

それはポニーテールの女性と手を握っているさやかも同じであつた。
そして、二人はいきなり壁の外へと飛び降りたのだ。

「うわあああ！」

「きやあああ！」

甲児とさやかは共に声を挙げた。まさか飛び降りたのだから。
だが、その次の瞬間、妙な浮遊感を二人が襲つた。何と、二人は今
正に空を飛んでいるのだ。

原因は分かっている。二人の謎の女性が空を飛んでいるのだ。
それに抱えられている甲児とさやかと共に飛んでいるのだ。
そして、四人の前には一台のヘリが浮遊していた。

「シグナム姐さん！フェイト隊長！例の人は見つかったんですか？」

ヘリの操縦士と思われる男性が二人に問い掛けた。

「ああ、期待はずれであつたがな」

それにシグナムと呼ばれた女性が答える。

甲児は訳が分からないままヘリに乗り込む。

「ヴァイス陸曹、急いでこのまま聖王教会に向かつて下さい。至急
騎士カリムにこの二人を会わせたいんです」

「了解、すつ飛ばしますよお」

ヴァイスと呼ばれた青年はそう言ってヘリを操縦する。

ヘリから甲児は自分達の居た場所を見た。

まるで西洋の城である。

それが今甲児の目の前に映っていたのだ。

（待ってるよ、エリオ・・・キャロ・・・必ず助けに行くからな）

甲児は窓の外に映る城を見て心にそう誓うのであった。

聖王教会

1

「騎士カリム、例の者をお連れしました」

あれから甲児とさやかはシグナムとフェイトの二人に連れられてとある場所に辿り着いていた。

最初見た時は正に西洋の教会を思わせる作りの建物であった。

そして、その中を歩く者もまるで西洋の修道者を思わせる服装を着ている者が殆どであった。

それは、今日の前に座っている女性も同じであった。

フェイトと同じ金色の長い髪に青い瞳をした女性であった。

「ようこそ、次元の彼方より来たりし旅人よ。私は此処聖王教会の騎士を務めている者でカリム・グラシアと申します」

女性が自己紹介を行った。とても澄んだ声であった。聞いているだけで心の汚れが洗い流されるのを感じた。

そして、そのカリムの隣にも一人の女性が立っていた。シグナムと同じ色のショートカットの髪型をしたピンク色の瞳をした女性であった。

その女性は少し警戒するような目線で甲児達を見ている。油断ならない構えを見せている。

「紹介が遅れましたね。彼女は私の秘書をして貰っている修道女の

シャツハ・ヌエラです」

「宜しく」

紹介されたシャツハは軽く頭を下げる。

「ちょっと待ってくれ、何なんだ？その『次元の彼方より来たりし者』って言うのは？」

「貴方達は別次元の彼方から来たのでしょうか？」

「え？どうしてそれを知ってるんですか？」

それにはさやかも以外であった。

何故彼女がそれを知っているのだろうか。

「それをお教える為にはまずこの世界について知っておく必要がありますね」

「この世界？なあ、此処は地球じゃないのか？」

「残念ですが此処は地球ではありません」

いきなりの発言であった。予想はしていたがやはりそう言われるとショックが大きいのは事実であった。

そんな二人の顔をまるで予想していたかのような顔をしながらカリムは話を続けた。

「この世界の名はミッドチルダと言います。貴方達の居た地球と言う星は私達で言う『第97管理惑星』と呼ばれております」

「管理惑星？あんた達は俺達の地球や他の星を管理しているって言うんですか？」

甲児の問いにカリムは頷いた。

「この星にはあらゆる次元の世界を管理している組織『時空管理局』と呼ばれる組織があります」

「益々凄いスケールの話になってきたな」

甲児は驚いた顔でそう言った。まさか地球を管理している組織が別次元に存在しているとは思っても居なかったのだから。だが、この次にカリムが放った言葉に甲児は更に驚く事になる。

「気になったんだけど、あの時シグナムさんやフェイトさんが使った凄い技術は何なんですか？」

「信じられないと思いますが、それらは魔法の力です。私達は魔法を駆使して戦っているのです」

「な！魔法だつてえ！」

それには甲児は盛大に驚かされた。魔法なんてファンタジーの産物だとばかりに思っていたのだから。

しかし明らかにこのカリムが嘘や冗談を言っているとはとても思えない。

「それじゃ、少し質問させてくれ。何でこの世界には機械獣が居るんだ？」

「機械獣？それはもしかして『機鋼獣』の事ですか？」

「機鋼獣？」

甲児は首を傾げた。初めて聞く言葉だ。この世界では機械獣をそう呼んでいるのだろうか。

「カリムさん、機鋼獣って一体どんな敵なんですか？」

今度はさやかが尋ねた。

「機鋼獣とは、機械の体を持ち鋼鉄の鎧に身を包んだ怪物です。常軌を逸した力を持ちまるで獣の様に暴れまわる事から私達はそう名づけています」

「でも、その機鋼獣だつてあんた達の魔法つて奴で倒せないのか？」
「残念だがそれは無理だ」

甲児の問いに横に居たシグナムが否定した。
それを聞いた甲児がシグナムの方を向く。

「それはまた何故？あれだけの力があれば機鋼獣と充分渡り合えるじゃないか？」

「その魔法の力が奴等機鋼獣には通用しないんだ」
「どう言う意味ですか？」

魔法が通用しない？

その言葉に疑問を感じたさやかが尋ねた。
すると今度はフェイトがそれに答えた。

「機鋼獣には私達の魔法を無効化する装置『アンチマジフィングフィールドAMF発生装置』が内臓されているんです」

「アンチマジフィングフィールド？」

「私達の魔法と言うのは体内にある『リンカーコア』で空気から魔力を生成して放つ物なのです。ですが機鋼獣はそれを無効化する装置が内臓されているのです。その為私達では機鋼獣を倒す事が出来ないのです」

「我々に出来る事と言えば機鋼獣の進路を変えさせたり時間を稼ぐ位しか出来ない。悔しいですがそれが今の私達の現状なのです」

そう言つてシャッハは悔しそくに拳を握り締めた。

甲児はその間も疑問を感じていた。そしてそれはさやかの口から放たれた。

「ねえ、機械獣が居るって事はこの世界にはマジンガーは無いのかしら？」

「ああ、それは俺も疑問に感じていた。機械獣が居るのだから当然マジンガーはある筈だけど・・・でもこの世界は地球じゃないんだある筈ないよ」

「そう・・・そうよね」

甲児の言葉にさやかは非常に残念そうな顔をした。

正に、その時であった。突如扉を勢い良く開けて修道者が入ってきた。顔が青ざめて息も荒れている。

「き、騎士カリム！大変です！き、機鋼獣が此处聖王教会に攻めてきました！しかも2体も居ます」

「な、何ですって！」

修道者の言葉にカリムは驚き立ち上がった。

由々しき事態である。

機鋼獣が二体。しかも今のこちらには機鋼獣に対抗出来る力が無いのだ。

「しかも、機鋼獣と一緒に歩兵部隊もこちらに向かってきています。現在魔道士達を総動員して対応していますが、恐らくそう長くは保ちません！至急避難を」

「くそっ、どうする事も出来ないのかよ」

甲児は拳を叩き付けて悔しがった。

この世界での魔法があゝの機鋼獣には通用しない。ましてや魔法を使

えない甲児やさやかでは話にならないのだ。

それを甲児は心底悔しがっていた。

すると、カリムがそっと甲児達の前に歩み寄った。

「兜甲児さん、弓さやかさん。私の後について来て下さい」

「え？」

「ついて来いって、何処へ行くんですか？」

「此処聖王教会の地下にある開かずの間へ貴方達をご案内します」

カリムは振り返りそれだけを告げた。

「騎士カリム、我々は外に出て迎撃に参加します」

「分かりました。ですがお氣をつけて下さい。機鋼獣が相手では私達の手には負えないのですから」

頷いてシグナム、フェイト、そしてシャッハは急ぎ外へ向かった。

「さあ、こちらへ」

カリムは甲児達の方を向いてそう告げた。

今の二人にそれを拒否する理由は何処にも無い為にそれについていく事にした。

部屋を出て通路を歩き、それから石造りの階段を一步一步下りていく。

「そう言えば聞いてなかったけど、どうして俺の来るのを知っていたんだ？」

「それは、私の持つレアスキルの『プロフェーテン・シュリフテン』を使用したからです」

「それって、もしかして未来予知って奴か？」

甲児の言葉にカリムは静かに頷いた。

「機鋼獣が現れたのは突然でした。突然現れいきなり町を破壊し、人々を虐殺し始めたのです」

「酷い・・・」

さやかは口元を手で覆ってそう言った。

甲児も拳を握り締めてそれを聞いていた。

「無論私達も抵抗しましたが、先ほどもご説明した通り機鋼獣には一切魔法が通用しないのです。この世界では魔法があるのと同時に魔法を主力としています。其処を機鋼獣は突いたのでしょう。今の私達には機鋼獣に対抗する手段が無いのです。ですが、ある時こう告げられたのです。『次元の彼方より来たりし者、深き眠りにつく古の巨人を目覚めさせ、災いを払う』と」

「それが俺達か・・・でも、その古の巨人って何だ？」

「甲児君・・・もしかしてそれって」

さやかの中である結論が出た。それと同時に三人の前には巨大な壁が立ちはだかった。行き止まりか。

甲児がそう思っていた時であつた。カリムがその壁にそつと手を添える。すると壁が眩い閃光を放って嘘のように目の前から消え去つたのだ。

「うわあ、すげえなあ。これも魔法なのかあ」

甲児は目の前で起こつた光景に感心と驚きを表していた。

「こ、甲児くん！あれ」

「え？」

だが、その横でさやかは驚愕の声を挙げる。そして指差す。さやか指差す方を甲児は向いた。そして甲児もまた驚愕した。

「な！あれは・・・」

甲児とさやかは開いた部屋の中に入った。

其処は白い部屋であった。

四方には見覚えのある機械や機材が所狭しと並べられている。

まるで光子力研究所の格納庫を思わせるつくりであった。

そして、その真ん中に立っている物、全長20mはある黒いボディを基調とした巨人が其処にはいた。

「な、何で・・・何で・・・此処に居るんだ」

甲児は驚いた。目の前に居る物は本来この世界には居ない存在なのだ。

その巨人こそ甲児とさやか最も知る物であった。その名は・・・

「マジンガー・・・Z」

「どうして？どうしてマジンガーZが此処に？」

さやかは頭に手を当てて叫んでいた。半ばパニックを起こしていたのだ。

「さやかさん、落ち着くんのだ！」

そんなさやかの肩を掴んで甲児が叫ぶ。さやかがパニックを起こしているのとは対照的に甲児は冷静であった。嫌、さやかがパニックを起こしているからこそ甲児は冷静になれたのだ。

「でも、でも何で此処にマジンガーがあるの？だって言ってたでしょ？この世界は地球とは違う世界だって！」

「ああ、俺も聞いた！だけど、此処にマジンガーがあるって事は俺達は無力じゃない！俺達は奴等に戦えるんだ！奴等機鋼獣と戦う事が出来るんだ！」

「・・・戦うの？マジンガーで・・・あの機鋼獣と戦うの？」

「ああ、何で此処にマジンガーがあるかは分からないけど、これは多分俺に戦えって言ってるんだ。きつとそうだ。だったら俺は戦う！このマジンガーに乗って奴等を叩き潰してやる」

そう言ってる甲児の目にはキラキラと闘志が漲っていた。

戦える。俺達は無力じゃない。

甲児の中にその言葉が宿っていた。

「これは、機鋼獣では無いのですか？」

初めて見たカリムはマジンガーを恐れるような目で見ていた。だが、そんなカリムにさやかは笑って言った。

「いいえカリムさん。マジンガーは機鋼獣じゃないわ。マジンガーは私達の世界に居るロボットで平和の使者なのよ」

「平和の使者……ですが、これは兵器ではないのですか？」

「いいや、カリムさん。それは違うよ。確かにマジンガーは見てくれば兵器だけど、あいつは俺の兄弟なんだ。俺のもう一つの体なんだ。アレに乗れば俺は人間を越えた超人になれる。神にも悪魔にもなれるんだ」

「神にも悪魔にもなれる……正しく魔神ですね」

カリムはマジンガーを見てそう言った。

それを聞いた甲児は思わず笑みを浮かべる。

「魔神か……確かにこいつにはピッタリの名前かもな」

甲児はそう言った。

その直後であった。激しい揺れが辺りに響く。天井から埃や砂等が降って来た。

どうやらのんびりしている時間は無いようだ。

「行くぞさやかさん！準備を頼む」

「任せて」

甲児とさやかは駆け出した。さやかは付近にあるコンソールの前に、甲児はマジンガーの近くに置かれていた赤い小型機に向かった。

「お前も一緒か、パイルダー」

甲児は目の前に佇む小型機を見てそう呟いた。
パイルダー。

マジンガーを操縦する上でなくてはならない存在である。

マジンガーの操縦装置であり、甲児が人間を超える存在になる為に必要な物なのだ。

だが、甲児の目の前でパイルダーの赤い色が少しくすんで見えた。

「わっ、凄い埃だ」

それは夥しい量の埃であった。

それもかなりの量が積もっている。

一体どれ程の間パイルダーとマジンガーは此処に置かれていたのだろうか。

少なくともこの埃の量からして明らかに千年は軽く越えている筈だ。

甲児はパイルダーの誇りを振り払うとパイルダーのハッチを開くボタンを押す。

開け、開いてくれ！

祈るようにボタンを押す。

ウィーンと音がすると同時にパイルダーのキャノピーが開いた。

「よし、パイルダーは生きてる」

甲児はパイルダーに乗り込むとスイッチを入れる。

かすかな振動と共にパイルダーに命が吹き込まれる。

メーターを見るとエネルギーは殆ど満タンの状態であった。

動く、動くぞ！

甲児の中で歓喜が舞い踊っていた。

「さやかさん、そっちはどうだい？」

「大丈夫よ。多少違うけど殆ど光子力研究所に置かれてるのと同じだから動かし方も分かるわ。マジンガーのエネルギーは満タンよ。何時でも行けるわ！」

「よし、見てろよ機鋼獣！俺達人間が無力じゃないって事を今から教えてやるぜ！」

甲児はパイルダーのアクセルを思いきり踏み込む。

パイルダーのノズルから炎が噴射され勢い良く飛び上がる。

「マジンGO！」

甲児が思わず叫んだ。魔神を目覚めさせる合言葉である。言う必要こそ無かったが本能的に出てしまったのだ。

そしてパイルダーはマジンガーの頭上に差し掛かる。

マジンガーの頭部にはポツカリと大きな穴が開いていた。

そう、パイルダーがスッポリと収まる位の穴が其処にあったのだ。

「パイルダーON！」

甲児の掛け声と共にパイルダーはマジンガーとドッキングした。

マジンガーの両の目が激しく光り輝く。

パイルダーを伝って甲児の全身にマジンガーのパワーが伝わってくる。

異様な懐かしさを甲児は感じた。

平和になってからマジンガーに乗る機械は滅法減ってしまったのだ。慣らし運転程度で乗る事はあったが、実戦と呼べる物は殆ど無かった。

だが、今から行うのは実戦だ。下手をすれば死ぬかも知れない。そんな状況なのだ。

パイルダーとドッキングしたマジンガーに命が吹き込まれる。

マジンガーが両手を天に突き翳して高らかに咆哮した。

まるで操縦者を、兜甲児の来るのを待っていたかのように甲高い声で咆哮した。

Ｚだ！俺のＺだ！

甲児は今歓喜に打ち震えていた。

今甲児はマジンガーＺと一つになったのだ。人間の力を超え、神にも悪魔にもなれる力を今甲児は手にしたのだ。

すると、突如マジンガーの乗っていた台座が天井に向かってせりあがっていくのを感じた。

「何だ？さやかさんがやったのか？」

「いいえ、多分自動でそうなるようにインプットされていたと思うの」

甲児の問いにさやかは答える。みるみる内にマジンガーは天井に向かっていく。すると、天井にあった巨大なハッチが開く、と同時にマジンガーの居た台座を覆うかのように透明なガラスケースらしき物が降りてくる。それはマジンガーをすっぽりと覆える位であった。そして、その上から降ってきたのは大量の水であった。

「わっ、もしかして上って湖かなのか？」

驚いた甲児がそう呟く、そのままマジンガーは上昇し、やがて地上

に姿を現した。

出てきたのはやはり教会付近の湖であった。広大な湖のど真ん中にマジンガーZは現れたのだ。

「ん？」

地上に出てきた甲児の目線に飛び込んできたのは、夥しい数の歩兵や恐竜に追われるように逃げ惑う魔道士達の姿であった。

数の上では圧倒的なのか傷ついた魔道士達が命かながら逃げ惑っている。

その上では先ほどのフェイト達が必死に抵抗を試みていた。だが、それも機鋼獣の前には無力に終わっていた。

「野郎！これ以上好き勝手させるかよ！」

甲児は早速マジンガーを走らせる。

マジンガーが大地を踏みしめる度に大地が揺れる。空気が震える。

これだ、コレがマジンガーのパワーだ！

マジンガーのパワーに喜びながらも甲児はまず魔道士達を追いかける歩兵達に向かった。

「これでも食らえ！」

そして歩兵達に向かってマジンガーの巨大な腕を振り下ろしたのだ。それを食らった歩兵達は忽ち蜘蛛の子を散らすかのように辺りに散らばった。

魔道士達、そしてフェイト達は突然現れたマジンガーに驚いた。

「ま、また新しい機鋼獣？」

「そりゃ違っぜフェイトさん。こいつはマジンガーZだ」

「甲児、甲児が乗っているのか？」

「ああ、皆下がっててくれ！こいつらは俺が叩き潰す」

甲児はそう言つてマジンガーを動かす。

足元に居る歩兵や恐竜達に対し巨大な足を踏み降ろした。

まるで人が蟻を踏み潰すかのような光景であつた。

先ほどまで魔道士達が苦戦していた歩兵や恐竜達がマジンガーの一踏みでペシャンコにされていたのだ。

歩兵達は突然の敵にまるで恐怖など感じておらず、それどころか果敢にもマジンガーに挑んできたのだ。

鋭く輝く剣をマジンガーの足に叩きつける。

だが、その度に剣は音を立ててへし折れる。

「お前等馬鹿か？力の差が分らないのかよ！」

歩兵や恐竜達が無謀にもマジンガーに挑む中、マジンガーも足を何度も地面に叩きつけた。

最早子供と大人の喧嘩の領域を超えていた。

圧倒的な力の差があるのだ。

「甲児さん！前！」

「え？」

だが、歩兵達に気を取られておりすぐ目の前にまで接近してきた機鋼獣に対応が遅れた。

巨大な鎌を振り上げて今正に機鋼獣がマジンガーに切りかかっている所であつた。

「うおっ！」

咄嗟にマジンガーは腕を挙げて鎌を防ぐ。激しい火花が舞い散り金属同士が擦れる音がする。

甲児はマジンガーの腕を見た。傷一つついてない。どうやらこの機鋼獣ではマジンガーに傷を負わせる事は出来ないようだ。

「野郎、不意打ちなんざしやがって！お返しだ！」

カウンターとばかりに今度はマジンガーの拳が放たれる。

それは機鋼獣の顔面に命中しその顔の原型を歪める。

そして殴られた機鋼獣は遙か後方にまで吹き飛んだ。

其処にはもう一体の機鋼獣が存在した。

二本の長い首を持った機鋼獣である。

その機鋼獣とぶつかり二体が尻餅を付く形で倒れる。

「凄い、あの機鋼獣を圧倒してる」

マジンガーの余りのパワーにフェイトはそう呟いていた。

今まで自分達が全く対抗出来なかった機鋼獣にマジンガーは勝っているのだ。しかも圧倒的なパワーで。

「さやかさん、スクランダーは無いのかい？」

甲児は通信モニターをONにして格納庫に居るであろうさやかに聞いた。

だが、さやかは被りを振った。

「駄目、何処に見当たらないわ！あるのはそのマジンガーだけなの」

「そ、そうか・・・」

それを聞いて少し残念そうになる甲児。だが、そんな甲児の目の前

で吹き飛ばされた機鋼獣が立ち上がる。

すると両手を振り上げて雄たけびを挙げてマジンガーに襲い掛かってきたのだ。

マジンガーもそれを迎え撃つ。

二体の腕が上空で交差して激しい力比べをしていた。

「パワー勝負か、臨むところだ！」

甲児もその勝負を遭えて受けた。

ギリギリと機械の軋む音がする。押し負けているのは機鋼獣の方であつた。

徐々に後ろに下がっていく。反対にマジンガーが徐々に押し上げていくのだ。

そんな時であつた。ふと機鋼獣の頭がフツと後ろに逸れて行く。

そして思い切りマジンガーの頭部に頭をたたきつけてきたのだ。

「わっ！」

思わず甲児が声を上げる。激しい振動が襲つて来て同時にパイルダーのキャノピーに思い切り頭をたたきつけた。

操縦桿を離してしまった為にマジンガーがヨロヨロと後退しだす。

それを見て再び機鋼獣が頭突きをお見舞いした。

ゴン！再び激しい振動がパイルダーに響き渡る。

わっ！わっ！

パイルダーの中でまるでミキサーにでも掛けられているかのような錯覚を甲児は感じた。

異様な吐き気を感じる。

それと同時に額から生暖かい物が流れ出ていた。

血だ、恐らく先ほどの激突で額を切つたのだろう。

そうしているとまた機鋼獣が頭を逸らしていた。

「野郎、調子に乗るんじゃない！」

また食らうのは勘弁と甲児はボタンを押した。

するとマジンガーの両腕が勢い良く飛び出した。肘辺りから激しいジェット噴射を起こして機鋼獣を吹き飛ばす。

それを食らった機鋼獣は思い切り地面に倒れた。

「そっちがそう来るならこっちだってやってやるよ！」

甲児がそう言っただけのボタンを押した。

するとマジンガーの口から猛烈な突風が放たれた。

強力な酸を含んだ風である。

ルストハリケーン。

マジンガーの持つ武器の一つでありそれを浴びた機鋼獣はみるみる内に装甲が腐食しボロボロになっていく。

其処へ戻ってきた拳を叩きつけた。

それを食らった機鋼獣はあっさりと砕けバラバラと大地に散らばった。

そして残ったもう一体の機鋼獣を見た。

その時には機鋼獣が既に武器の発射態勢に入っていた。

両の頭部が怪しく光っている。

恐らく光学兵器を使用するつもりだ。

咄嗟に避けようとしたが甲児はハッとした。

今マジンガーの後ろには大勢の魔道士達と、そして聖王教会がある。まともに食らえばそれらが一瞬で瓦礫の山になる。

「避ける訳にはいかねえか・・・だったら避けないまでだ！」

意を決して甲児とマジンガーはその場に仁王立ちする。
そして機鋼獣の頭部から激しい閃光とばかりにビームが放たれた。
そのビームはマジンガーの胸部に直撃する。
凄まじい閃光と衝撃がマジンガーに伝わった。
だが、ビームを食らったマジンガーの胸部には傷どころかこげ一つ
ついていない。

「今度はこっちの番だ！食らいやがれ！」

今度はマジンガーの胸にある赤い放熱板が激しく発光しだした。
其処から徐々に熱が籠っていく。
そして一気に放たれた。
プレストファイヤー！

マジンガーZの最強の武器である。
それを食らった機鋼獣はマジンガーZとは対照的にどんどん溶け出
していく。

苦しみのた打ち回り、苦痛の悲鳴を機鋼獣は挙げる。だが、それで
容赦する兜甲児ではなかった。

「てめえのせいで大勢の人が苦しんだんだ！もう二度と出て来るん
じゃねえ！」

甲児が叫ぶ。その時には既に機鋼獣は最早原型を留めない形となっ
ていた。

機械が殆ど融解しておりゲル状の形になっていた。
戦いは終わった。聖王教会に迫って来た二体の機鋼獣は兜甲児と、そ
してその愛機マジンガーZの活躍により倒されたのだ。

「凄い、これが・・・騎士カリムの言っていた古の巨人」
「我々が倒せなかった機鋼獣をあかも呆気なく」

「まるで神ですね」

フェイト達はマジンガーを見てそう呟いていた。

シャッハが思わず神と呟いていたが其処へシグナムが言葉を入れる。

「嫌、もしかしたら悪魔なのかも知れないぞ。あの力が私達に向けられたら私達には対抗する力がない」

シグナムはそう言った。

「心配ないさ。シグナムさん。俺がマジンガーを動かしてる以上あんならの敵になったりしねえよ」

「聞いていたのか？」

会話を聞かれていた事にシグナムは少し驚いたがやがてフツと笑みを浮かべる。

「その言葉、信用しても良いんだな？」

「勿論だ。俺が何でこの世界に来たのかは今分らないけど、とにかく俺が来た以上これ以上機鋼獣の好き勝手にはさせねえよ」

甲児が拳を握り締めてそう宣言した。

「甲児くん、怪我大丈夫？」

「ん？怪我？」

モニターにさやかな顔が映り心配そうな顔で見つめていた。

甲児はふと思いだし額に触れてみた。

傷は完全に塞がっているらしく出ていた血も乾いていた。

「どつって事ねえよコレ位、只のかすり傷さ」

「でも、すぐに治療しないと」

「嫌、それよりもまずはすべき事がある」

「すべき事？」

さやかが首を傾げるなか甲児が言った。

「決まってるだろう。エリオとキャラ達を助けに行こうぜ」

4

薄暗い部屋の中で不気味なロープを纏った物が居た。

その目の前には光輝くモニター一杯に機鋼獣を蹴散らすマジンガー
Zが映し出されていた。

「ククク・・・遂に来たようね、古の巨人」

狂おしく笑いながら言うその者の顔は正に異様であった。

半分が男で半分が女だったのだ。

男女がそう言いながら両手を振り上げて笑う。

「フハハハハハ、これ wait していた！貴様が来るのをどれ程待っていた事か！遂に・・・遂に我々の悲願が成就される」

『その通りだ』

男女の後ろから声が響いた。

振り返ると其処には巨大なカプセルの中に並々と注がれた液体の中を浮ぶ物があつた。

人の脳である。その脳が浮んでおりそう続けていたのだ。

「おお、我等が主『機鋼王』様」

『我等機鋼獣を倒す古の巨人。嫌、魔神であつたな』

「はっ、ですが、これで機鋼王様の悲願も適うと言つ物」

『フッフ、だが、その為にはあの巨人が邪魔になる』

脳はそう言つてモニターに浮ぶマシンガーZを見た。

圧倒的パワーで機鋼獣を退けたマシンガーは正に彼等には脅威であつた。

「フッフ、良いではありませんか。暫し戦いを楽しむのもまた一興かと」

『それもそうだな。ま、楽しみが増えると考えればそれもまたよし』

そう言うとお互い狂つたように笑い出した。

そんな二人を薄暗い蝋燭が照らしていた。

激闘

目の前には西洋風の城が佇んでいた。甲児はそれを遠くから見ていた。

勿論今の甲児はマジンガーZに乗っている。日の光に当たって黒いボディが光沢を放っている。

その姿は雄雄しく、また頼もしさも感じられた。

「待つてろよ、必ず皆助けてやるからな！」

硬く拳を握り締めて甲児は呟く。あの城の中には大勢の人々、そしてエリオとキヤロの二人が捕まっているのだ。絶対に助け出す。甲児はそう心に強く誓っていた。

「甲児」

ふと、自分と呼ぶ声が聞こえた。シグナムだ。

「此処まで来た時点で聞くのも変だが・・・勝算はあるのか？」

「ああ、俺とマジンガーは無敵だ。絶対に負けない！」

「随分な自信だな」

シグナムは未だにマジンガーを信じては居なかった。あの時の強さを目の当たりにしてもまだ奴等と戦えるかどうか微妙な気持ちなのだ。

それは、奴等の力を良く知っていればこそその疑問なのだ。

しかし、此処まで来るのも結構骨だったぜ。

あれから地下の格納庫を探したが結局見つかったのはマジンガーだけであった。その中には甲児が今欲している紅の翼は何処にも無か

ったのだ。

しかし悪い報せだけではない。あれから良い物が見つかったのだ。それは甲児の愛用していたパイロットスーツである。

赤を基調とした衝撃緩ショックアブソーバー和剤を内臓したスーツとクリーム色のヘルメット一式が其処にあった。

これのお陰で以前のような怪我をする心配は無くなったのだ。

「しかし、見れば見るほど西洋風な城だなあ・・・」

今更ながら甲児は呟いた。確かに目の前に映るのは西洋の時代にあった城を思わせていた。

石造りの壁、円柱型の屋根、堤防や架け橋もある。まるきり西洋である。

まるで中世のヨーロッパの時代にタイムスリップしたかのような錯覚を感じた。

そんな時であった。城の架け橋が降り、中から夥しい数の歩兵達が現れたのだ。

恐らくこれからまた何処かへ攻めていくのだろう。

「冗談じゃねえ！これ以上てめえらの好き勝手になんざさせるか！」

これ以上犠牲を出す訳にはいかない。甲児とマジンガーは意を決して崖から飛び降りて歩兵達の目の前に降り立った。

歩兵達にとっては突然の出来事であった。

何しろいきなり目の前に18mはある巨人が降り立ってきたのだから。

当然歩兵達はパニックに陥っている。其処へ容赦なくマジンガーの拳が振り下ろされる。

グシャリと音を立てて歩兵達がペシャンコにされていく。原型を留めておらず、機械のパーツが辺りに散らばっていく。それでもマジ

ンガーは止まらない。

全ての歩兵を叩き潰すかのように拳を放ち続ける。

すると、歩兵達が出て来た城門から今度はマジンガーと同じ位の大
きさの機械の化け物が現れた。機鋼獣だ。

ずんぐり体形で両腕、両足の太さはマジンガーより太い。明らかに
パワー型の機鋼獣である。

「へっ、やっと本命のお出ましかよ」

待つてましたとばかりに叫び甲児が機鋼獣に向かっていく。機鋼獣
も両腕を振り上げて雄たけびを挙げながらマジンガーに迫る。

その頃、牢屋内に捕らえられていたエリオとキャラは外の騒がしさに
気づいていた。

そんな時に、以前甲児達を連れて行った男が下卑た笑みを浮かべなが
ら牢屋を開く。そしてエリオ達の前に立つ。

「出る！貴様等はこれから我等の役に立って貰う」

男が棒をエリオの前に突き立てて言う。

そしてその男の背後から数体の機械兵士が歩み寄ってきた。それに
キャラは怯え、そんなキャラを庇うようにエリオが前に立ちはだか
る。

「役に立つ？それって一体どう言う意味ですか？」

「お前達は此処に居る奴等より優れた能力を持っている。その能力
を我等の為に役立てて欲しいだけだ」

「お断りします！僕は貴方達に力を貸す気なんてありません！」

毅然とした表情でエリオはそう言った。だが、男の笑みは消えない。

「ふん、逆らうのならそれも良いだろう。貴様等の脳を切り開いて改造すれば嫌でも言う事を聞くようになる。連れて行け」

男に命じられるがままに機械兵士達の手が二人に迫る。

「い、イヤア！」

機械兵士の一体がキャ口を掴みそのまま連れて行くとした。

「止めろ！彼女を放せ！」

咄嗟にエリオは付近に落ちていた棒を拾い上げて機械兵士を殴りつけた。だが、兵士には全く効いておらずそのままエリオを壁まで吹き飛ばす。

「ぐあっ！」

「フン、元気な小僧だ。その溢れんばかりの力を我等の役に立てろ」

男が鼻で笑う。そしてエリオの元にも機械兵士が迫って来た。

強靱な腕がエリオを地面に押し付ける。常人離れした力である。とても子供が跳ね除けられる力ではない。

「離せ！離せえ！」

エリオが叫ぶ。だが、それでも機械兵士達は離す気配が全く見られない。

それどころかまるでエリオを潰すかのように地面に押さえつけてい

るのだ。

「離せええええええ！」

そんな時であった。エリオがカツと目を大きく開くと同時に彼の周囲に激しい電撃が起こった。

電撃は辺りに響き渡りそれらが全て自分とキャロを連れて行こうとしていた機械兵士に向けて放たれた。

それを浴びた機械兵士は煙を巻き上げて倒れていく。内部機械を先ほどの電撃でズタズタにされたのだろう。もう機械兵士は動かなくなった。その光景を目の当たりにした男が怯えた顔になる。

「き、貴様・・・わ、我等に逆らってどうなるか分かっているのか？」

口では恐ろしい事を言っているつもりらしいが今の男に何の影響力もない。そんな男の前にエリオは立つ。

「そんなの分かりませんよ。でも、お前達みたいな奴等の言うとおりになるなんて僕は・・・絶対に嫌だ！」

そう言つて男の顔を思い切り殴り飛ばした。殴られた男はそのまま鉄格子に叩きつけられて動かなくなった。そのままエリオはキャロの元へと駆け寄る。

「大丈夫？」

エリオの声にキャロは頷く。それを見てホッとした。だが、それも束の間であった。異変を察知したからか二人の居る牢屋に多数の恐竜が押し寄せてきたのだ。

恐らく反抗するなら殺害せよと命令を受けていたのだろう。恐竜達の目には殺気でギラついていた。

恐竜達の放つ殺気にキヤロは怯え出す。それをエリオが庇うように前に出る。

「大丈夫。僕が守るから・・・来い！トカゲ共！」

エリオは叫び体から先ほどのように電撃を放つ。電撃を浴びた恐竜が次々と倒れていく。だが、余りにも数が多すぎる。

迫ってくる度に電撃を当てていくエリオだが、そんな彼にも限界が見え始めて来た。

徐々に顔に苦悶の表情が浮んでくる。やがて、ガクンと膝が折れてその場に座り込んでしまった。

完全に力が切れてしまったのだ。

電撃が放てなくなつたと分かると恐竜達が一斉に襲い掛かる。

「く・・・くそぉ・・・」

エリオは愚痴った。何故自分は無力なのだろう。たった一人の少女を守れず、何も出来なかつた自分に悔しさを感じた。恐竜の牙が迫る。もう間も無く自分はその牙で体をズタズタに引き裂かれて死ぬのだろう。

そう思っていた。だが、それは突如放たれた雷光により起こる事は無かった。

「え？」

見ると目の前に居たはずの恐竜達は皆黒こげになっていた。そして、そんな二人の前にフェイトが立っていた。

「エリオ！キャロ！二人共大丈夫？」
「もしかして・・・フェイトさん」

エリオがそう言うのとフェイトはエリオ達の元へ駆け寄った。するとエリオの体からふっと力が抜ける感覚を覚えた。倒れそうになるエリオをフェイトがそっと抱き締める。

「御免ね・・・怖かったよね」

「フェイトさん・・・助けに来てくれたんですね」
「うん・・・遅くなつて御免ね」

フェイトはそう言うのと今度は隣に居たキャロも同様に抱き締めた。二人はフェイトの体の温もりを感じた事によってようやく安堵の気持ちになれた。かと思うと其処でキャロが大粒の涙を流し始めた。余程恐ろしかったのだろう。薄暗い牢屋の中に閉じ込められて何時殺されるか分からない状況化に置かれていたのだ。こうして泣く方が自然である。

それを見ると、エリオもまた大粒の涙を流した。幾ら気丈に振るついてもまだ10歳の少年である。

フェイトはそんな二人を強く抱き締めるのであった。

外では甲児のマジンガーZが機鋼獣を叩きのめした後であった。マジンガーの足元にはスタボロにされた機鋼獣が横たわっている。そして、城からは黒い煙が昇っていた。城の中からシグナムが現れた。

「甲児、こっちは無事だ！捕まっていた人達も皆助けたぞ」
「そうか、こっちもやつと外の敵を片付け終わったぜ」

手を叩きながら甲児は足元を見る。其処には先ほどまで居た無数の歩兵達の残骸もあった。

マジンガーの手により城の残存兵力は蹴散らされたのだ。機鋼獣さえ居なくなれば魔道士でも城の制圧は容易い。

しかしそれは逆にマジンガーの力無しでは城の制圧は成しえなかったと言う事になる。

「それじゃさつさと戻ろうぜ、こんな所に1秒でも長いなんかしたくないしょ」

甲児が軽口を叩く。だが、その時であった。

突如甲児の頭上を照らしていた筈の日の光が消えた。雲が隠したのかと思つて頭上を見たが、それは違った。

空には1体の巨大な機械が立っていたのだ。西洋の鎧騎士を思わせる風貌をしており背中には赤いマントが靡いていた。

手には巨大なランスが握られており雄雄しく空からマジンガーを見下ろしている。

「まだ居たのか！」

頭上を見上げて甲児が叫ぶ。だが、それを見たシグナムが驚愕した顔になった。

「あれは！まさか、機鋼騎士か！」
ガーディアン

「機鋼騎士？何だそりゃ」

甲児がシグナムの方を見る。

「機鋼獣を統括する奴等だ、気を付けろ。奴等は機鋼獣とは別格だ」

シグナムが警告する。だが、それで引き下がる甲児ではない。強敵が前に立てば甲児は寧ろ燃え上がって来るのだ。それが兜甲児と言う男である。

すうっと、鎧の騎士がマジンガーと同じ大地に降り立つ。お互いが静かに睨み合っていた。

『我が城を陥落させたのはお前か？』

な、喋った！

甲児は驚いた。突然目の前の騎士が甲児に語りかけて来たのだ。だが、どうもおかしい。聞こえるのは聞こえるのだが何処か妙な感覚を感じた。

「ああ、俺がぶっ潰してやったぜ」

疑問に思うが今は目の前の敵に集中しなければならない。そう思い甲児は叫んだ。

『何だと？貴様も我等と同じ機鋼騎士なのか？』
ガーディアン

「るせえ！マジンガーは機鋼騎士なんかじゃねえ！俺の愛機だ！俺の手足だ！」

『何と、人間の奴隷になっているのか？哀れな。我等と同じ無敵の体を持ちながら下等な人間に味方するとは』

機鋼騎士が嘆きの声を挙げる。

「何だ？何を言ってるんだ？」

甲児には機鋼騎士の言っている事が良く分からなかった。何故奴等はマジンガーを機鋼騎士と間違えたのだろうか。そしてさ

っきの言った言葉は一体何を意味するのか。

『まあ良い。下等な人間の味方をすると言っのなら貴様を打ち砕くだけだ!』

「やってみろ!」

お互いが叫び戦闘態勢を取る。

機鋼騎士はランスを構え、マジンガーはファイティングポーズを取る。

甲児はふと騎士の顔を見た。

まるで中世の騎士甲冑である。

兜には丁字に開かれた穴がある。其処から外の風景を見るように作られたのだろう。

もしかして、中に顔があるって訳じゃないよな。

思わず甲児は連想した。其処に隙が生じたのだろう。一気に騎士がマジンガーとの距離を詰める。

そしてランスの腹をマジンガーの頭部に叩きつけたのだ。

ガツンと音がして激しい衝撃が甲児に襲い掛かる。

「うわっ!」

甲児は声を挙げた。それと同じようにマジンガーは横に吹き飛ばされる。

何てパワーだ!

明らかに機鋼獣とは別格の強さを持っていた。ふと、甲児は殴られたマジンガーの顔を見た。

特に外傷はない。どうやらあの武器では超合金Zを傷つける事は出来そうにない。だが、あれから放たれるパワーをまともに食らい続ければいずれは参ってしまう。

『フン、我が城を陥落させたからどの様な猛者かと思えば、只のこけおどしか』

「なにいい！」

突如、目の前の騎士が甲児を、マジンガーを鼻で笑った。

それが甲児にはむしろ腹が立ったのだ。

自分を馬鹿にされたから怒ったのではない。マジンガーを馬鹿にされた事に怒ったのだ。

マジンガーZは亡き甲児の祖父『兜十蔵』が甲児の為に残した遺産でもあり、無敵のロボットなのだ。

それを馬鹿にされると言う事はひいては祖父を馬鹿にされた事になる。

それが甲児には溜まらなく悔しかったのだ。

「野郎！マジンガーを馬鹿にするたあ良い度胸してるじゃねえか！」

『ほう、その騎士はマジンガーと言うのか。ならば我も名乗ろう。』

我こそは機鋼騎士ガーディアンの一人ガウス。我が城を壊した報いだ。貴様は我が槍で地獄へ叩き落してくれる！」

高らかに宣言するとガウスが猛然と槍を振るってきた。しかし二度も同じ攻撃を食らう甲児ではない。

咄嗟にかわし槍を脇で挟んでそのまま力任せに持ち上げたのだ。

グググと槍が撓りガウスを持ち上げていく。

見ればガウスはマジンガーよりも一回り大きい。マジンガーZが1

8mなのに対しガウスは推測でも22mはある。

その巨体はマジンガーは持ち上げているのだ。

凄まじいパワーである。

「おりゃあ！」

雄たけびを挙げてそのままガウスを地面に叩きつける。その際に槍を手放してしまったせいかな。今槍はマジンガーの手にある。

「こうしてやる！」

甲児は言って槍を真つ二つにへし折ってしまった。折った槍をその場に投げ捨てる。

「へん、これでもう俺を地獄に叩き落せなくなったな」

『ほざけ！ 我の武器は槍だけではないぞ！』

ガウスは立ち上がる。するとガウスの胸当てが開き、中から巨大なレンズの様な物が現れた。

それを見た甲児は戦慄した。あの巨大なレンズはまさか……。

『神の光で焼け死ぬが良い！』

ガウスが言つと同時に胸のレンズから猛烈な光が放たれた。

甲児は咄嗟にそれを避けた。その直後光の当たった地面は瞬く間に蒸発してしまった。

やはり、高出力ビームか！

甲児はそれを見てそう思った。かなりの出力を誇っている。まともに食らえばマジンガーは無事でも自分が危うい。しかも避けた後まだ立ち上がっていないマジンガーに対し再び発射しようとしているガウスが目の前に居た。

「それならこっちはこうだ！」

甲児は叫びボタンを押す。するとマジンガーの胸の放熱板から熱が放たれ猛烈な熱線が放たれた。

プレストファイヤーだ。

ガウスの高出力ビームとマジンガーのプレストファイヤーが激しくぶつかり合い凄まじいプラズマ光を放っている。

パワーはほぼ互角であった。お互いの放つ武器が丁度真ん中でせめぎあっているのだ。

『おのれ、格なる上は！』

ガウスは意を決したかのように呟くとビームの出力を上げだした。徐々にマジンガーのプレストファイヤーが押されていく。

「にやろう！こっちだって！」

負けじと甲児もプレストファイヤーの出力を上げる。だが、そんな時耳障りな警告音が響き割った。

見るとエネルギーメーターがレッドゾーンギリギリをマークしているのだ。

このまま行けばオーバーヒートを起こし回路が焼き切られてしまう。だが、今はそんな事を言ってる場合じゃない。例え回路が焼き切られても良い。もう少しだけ持ちこたえてくれ、マジンガー！

甲児は祈るように出力をドンドン上げる。アラートの鳴りがドンドン激しくなっていく。

両者の激しい攻防が続いている。マジンガーの体から徐々に煙が上がり始めた。機械が熱を持ち出したのだ。

プレストファイヤーは最もエネルギーを消費する武器である。長時間の放出は機械にダメージを与えるのだ。

それでも、甲児は引き下がる訳にはいかない。こっちも苦しいが、きっと向こうも苦しい筈だ。

甲児は思った。その通りであった。見ればガウスの体からも煙が上がり出している。体からスパークが起こり徐々にそれが拡大してい

るのだ。

こうなれば我慢比べであった。
どちらが先に碎けるか。

『我は誇り高き機鋼騎士だ！貴様等下等な人間如きに負ける筈がないのだあ！』

「そうかい、だったらてめえに教えてやる！てめえらが下等だと罵った人間の底力・・・受けて見やがれえ！」

お互いが叫んだ。

結果・・・打ち勝ったのはマジンガーZであった。
殆ど僅差であった。

その差でマジンガーのブレストファイヤーはガウスの高出力ビームを打ち破りそのままレンズごとガウスの胴体突き破ったのだ。

咄嗟に甲児はボタンを切る。マジンガーの胸からブレストファイヤーが止まる。

それと同時にアラートが鳴り止んだ。どうやら発射停止と同時に急性冷却状態に入ったのだろう。

今のマジンガーは腕一本動かない状態だ。

だが、それは目の前のガウスも同じであった。

胴体突き破られそのまま上半身と下半身が分断されて地面に倒れていたのだ。

「ふう・・・」

甲児はふと溜息をついた。とんでもない敵であったがどうやら勝てたようだ。

ヘルメットを脱ぎ額に手をやる。じつとりと汗が手についていた。相当汗をかいていたようだ。

見れば体中が汗まみれなのに気づく。異様な湿気を感じた。

「うへえ、早く着替えたいぜ」

戦いが終われば緊張も解れる。そう言った感じで甲児はパイルダーの中でそう呟くのであった。

倒れて動かなくなったマジンガーZと完全に破壊されたガウス、そして陥落した城、それらを遠くから見つめる者達が居た。

女性であった。青い色のピッチリしたスーツに身を包んだ女性が二人それを見下ろしていた。

一人は青紫色のショートヘアの鋭い目つきで背の高い女性である。もう一人は栗色で眼鏡を掛け、コートを羽織った女性であった。

「あれが古の巨人・・・『魔神』か」

「そうみたいねえ、確かに機鋼騎士^{ガーディアン}を倒したのは凄いですけどお」

眼鏡の女性が間延びした口調で言う。
しかし二人共明らかに不満そうだ。

「ガウス如きであれだけ苦戦するようではこれから先あの巨人では勝てそうにないな」

「ですわねえ、あのまま管理局に置いておけば確実にあの巨人は負けてしまいますわあ」

「だが、我々が表立って動く訳にはいかない。暫くは様子見だな」

「何とも肩身が狭いですこと」

「ぼやくな。それより、早く戻るぞ」

「はあい」

そう言つと二人は足早にその場を去つた。

二人が去つた後には何もなく、只二人が見ていた光景だけが其処にあった。

機動六課

甲児は今マジンガーの整備をしていた。此処聖王教会地下にあるドックにはマジンガーを整備する設備が整っているのだ。

その為こうして甲児一人でもマジンガーの整備が出来るのである。隣ではさやかが同じように計器を操作していた。ロボットを持たないさやかが出来る事は甲児の手伝いである。

「それにしても、一体誰がこんな物を作ったんだ？」

「さあ？只この世界の過去でもこれだけの設備は作れそうにないし」

さやかは言った。その通りなのだ。此処ミッドチルダは一見すると甲児達の世界より遥かに優れた文明を持って良そうだが、その殆どが魔法を頼っているのだ。

その為マジンガーの様な巨大ロボットを作る技術は残念ながら此処には無い。

ましてやそれを整備出来る施設は現状では此処しかないのだ。

幸い此処には光子力のチャージや超合金Zの修理などが行える為一安心ではある。

「兜様、弓様、食事をお持ちしました」

声がした。扉を開けて入ってきたのはシャッハであった。手には二人分のハムサンドとスープが御盆に乗っていた。

「やりい！丁度腹減ってたんだ。ナイスタイミングだよ」

「有難う御座います。シャッハさん」

「いえ、今の私に出来る事はこれ位ですから」

さやかのお礼の言葉にシャツハは毅然とそう答えた。此処でお世話になるようになってからシャツハには色々とお世話になっている。彼女は本当に色々な所に気が回るのだ。流石は修道女である。

「美味い！さやかさんも食いなよ。美味いぜこれえ」

「もう、食いしん坊ねえ甲児くんは」

一人シャツハから渡されたサンドに夢中になる甲児にさやかとシャツハは笑みを浮かべる。

ふと、シャツハは格納庫に映るマジンガーを見た。

特徴的な口と耳に生えた二本の角、そして黄色い目がこちらを見ている。

まるで今にも動き出しそうであつた。

「どうしたんだい？シャツハさん。マジンガーをじいつと見てて・・・」

「いえ、少し不安になったのです。このマジンガーは何時かこのミッドチルダに災いをもたらすのではないのか・・・と」

「どういうことだ？」

甲児が首を傾げる。そんな中、シャツハが説明に入った。

「此処ミッドチルダでは遙か昔、このマジンガーほどではありませんせんが強力な『質量兵器』がありました。そのせいで一度文明が滅んだ事があるのです」

とても重い顔でそれを言った。それを聞いた甲児はシャツハの不安も理解出来た。

この世界ではマジンガーは立派な『質量兵器』なのだ。次元航行船の砲撃にすら耐え切れる装甲。無尽蔵のエネルギー。更には強力な

武器の数々。言ってしまえばマジンガーは歩く凶器なのだ。

もし、もしもそのマジンガーが悪しき者の手に渡れば間違いなくミッドチルダは終焉を迎えるのは確実と言えた。

「心配ねえよシャツハさん。俺が居る内はマジンガーを悪魔になんかせねえ。マジンガーは平和の使者なんだ。人々の自由と平和を守る為にこの世界に使わされたんだ」

拳を握り締めて甲児は言った。とても力強い言葉であつた。それを聞いたシャツハは少しだが安心した。甲児が居る間は決してマジンガーは人類に敵対心を向けたりはしない。そう確信出来たのだ。

「なあ、ところでずっと気になってたんだけどさあ」

甲児がここぞとばかりにシャツハに尋ねた。
それにシャツハは無言で頷く。

「あんたらが魔法とかを使う際に手に持つてる杖みたいなもの……あれって何なんだ？」

「兜様はご存知ないのでしたね。これらは私達の世界で『デバイス』と呼ばれております」

「デバイス？もしかしてそれって補助的な役割を果たす物なの？」

さやかが尋ねた。それにシャツハは頷く。

「その通りです弓様。このデバイスを用いて私達は魔力を攻撃や補助等に使用しているのです」

「へえ、てつきり魔法つつからほつきか杖を持って変な呪文を唱えて出すのかと思ったけど、意外と近代的なんだな」

甲児がそう呟いた。確かに今まで甲児が見た三人のデバイスはどれも近代的な技術が使われていた。

「なあ、それって作り方とか教えて貰えないのか？」

「専門の知識を持つ者・・・つまり『デバイスマスター』と呼ばれる方であれば可能かと思いますが、残念ながら此処にはその様な者はおられません」

シャツハの発言に甲児は心底残念そうな顔をした。科学者の端くれである甲児にとってこの世界のデバイスはとても興味をそえられる代物なのだ。出来れば是非とも研究して作ってみたい。そう思っているのだ。

つくづく甲児は凄いとさやかは思った。

全く知らない異世界に飛ばされたと言うのにもう慣れてしまっている。それどころか今の甲児はこの世界の技術を吸収しようとしているのだ。普通の人間なら発狂してしまいそうな状況なのに。

「そう言えば、エリオとキャロはどうしてるんだ？」

「二人なら今はフェイト執務官と一緒にですが・・・どうかしましたか？」

「嫌、二人共元気かなあと思ってさ」

頬を掻きながら甲児は言う。あの後甲児は二人とは会ってないのだ。そのまま此処に帰還して整備に入っていたのだから。

「宜しければお会いしますか？」

「良いんですか？」

「ええ、貴方達には多くの人々を救って頂いた恩義があります。これくらいでしたら容易い事です」

「そっか。だったらお言葉に甘えんとするよ」

甲児もさやかも頷き立ち上がる。シャツハは二人を案内するように部屋を出て通路を歩いた。

道を行く間にすれ違う人達が居るが、その人達の甲児に対する視線が何処か痛々しかった。

無理もない。聞いた話だが、此処ミッドチルダでは質量兵器の使用はご法度なのだ。ましてやその質量兵器を此処聖王教会に置いておくなどもつての他である。その為その操縦者である兜甲児に対して冷たい視線をぶつけられているのだ。

中には「何故あの様な者を匿う必要があるのだ」とか「あの様な質量兵器など即刻破壊すべきだ」とか小声で言われている。

勿論甲児もその囁きは耳に入っている。だが、それで一々事を荒立てていてはそれこそガキの分類である。

それ位は甲児も自覚していた。だが、内心は穏やかではないのは事実である。

その証拠に甲児の手は硬く握り締められていた。

「失礼します」

やがて、シャツハは目の前の扉の前でそう言葉を発した。すると中から「どうぞ」と声が聞こえたのでシャツハはゆっくりとノブを回して扉を開く。

開かれた扉の奥に誘われるように甲児とさやかは入っていく。其処には豪華なテーブルと椅子に座っているカリム、そしてフェイトとシグナムと呼ばれる女性達が其処に居た。勿論その中にエリオとキャロも居る。

「よ、元気そうだな」

甲児がエリオを見てそう言った。それを聞いてエリオも頷く。その

顔はとても活き活きとしていた。

「どうやら元気そうだ。それを見て甲児も安心する。」

「どうぞ、立ち話もあれでしょうし」

「そんじゃ、遠慮なく」

カリムが指定した席に甲児とさやかは座った。シャツハはカリムのすぐ横に立つ。

「兜甲児さん、弓さやかさん、聖王教会騎士を代表して貴方達に敬礼を言わせて貰います。貴方達のお陰で多くの人々の命が救われました」

「いやあ、俺は当然の事をしたつもりなんだけどなあ」

カリムの言葉に甲児は少し恥ずかしくなったのか頬を紅く染めて頭を掻く。甲児も男だ。カリムの様な美人にそんな事を言われたら思わず照れてしまうのは当然である。

「いて！」

そんな時、ふと甲児の脇腹に痛みが走った。見るとさやかが甲児の脇腹を抓っているのだ。

そのままさやかの顔を見てみると「何鼻の下を伸ばしてるのよ」と口をへの字に曲げたさやかが居た。

「どうやら自分が気にしてない間に相当鼻の下が延びてしまったようだ。」

だが、この状況では仕方が無いのでは無いだろうか。

何しろ今目の前に居る殆どが女性でありしかも皆かなりの美人なのだ。

まるで桃源郷にでも迷い込んだ感じである。鼻の下が延びない筈は無いのだ。

寧ろ伸ばさないようにする方が難しい。

「そう言えば、お互いまだ自己紹介をしてなかったね。私は管理局の執務官をしています『フェイト・テストロッサ・ハラウン』と言います」

「その補佐をしている烈火の将『シグナム』だ。宜しく頼む」

カリムの両隣に座っていたフェイトとシグナムがそれぞれ自己紹介をした。フェイトのミドルネームについて甲児は疑問に思ったが此処では問わない事にした。何か深い事情でもあるのだろう。そう思っていたのだ。

「俺は兜甲児と言います。元の世界では科学者の端くれです」

「私は弓さやかと言います。甲児くん程ではありませんが私も光子力の知識はあります」

それに続いて甲児とさやかは自己紹介をする。

「それで甲児さん、ずっと気になっていたのですが、その『光子力』とは何ですか？」

「ああ、光子力ってのは俺達の世界の富士山麓の地下深くで取れる鉱石『ジャパニウム』を生成して作れるエネルギーでほんの少しの量で膨大なエネルギーになる上に無公害のクリーンエネルギーなんだ」

「な！」

「そんな物があるのか！」

甲児の説明にフェイトは勿論シグナムやカリム、シャツハ達は驚きの顔を浮かべていた。

「あんたらの管理する地球ではそのジャパニウムは取れないのか？」

「ええ、私も以前地球には居ましたけど・・・その様な鉱石もエネルギーも初めて聞きます」

「何？どう言う事だ。光子力って言ったら世界規模で有名な筈だけど？」

「嫌、私もそれを耳にするのは初めてだ」

地球出身と言うフェイトとシグナムが揃ってかぶりを振った。

一体どうなってるんだ？

甲児は頭を悩ませた。甲児達の居た地球で光子力を知らない国など居ない。現に光子力の平和利用の第一歩が実現した事により各国のエネルギー問題は急速に解決に向かっていているのだ。それなのにこの二人は知らないといっているのだ。

「無理ないんじゃない甲児くん。私達は別次元から来たんだから。

もしかしたら此処の世界には光子力やマジンガーが存在しない世界なんじゃないかしら」

「パラレルワールドって奴か」

甲児は呟いた。

世界は幾つもの枝分かれした世界で成り立っている。

それこそ数え切れない程の。

その中の一つに甲児とさやかは紛れ込んでしまったのだ。

それが今目の前にある魔法が発達した世界なのだろう。

だが、甲児達の中にはまだ疑問があった。

「それじゃ、何でこの世界にマジンガーがあったんだ？」

「そうね、明らかに別世界なのにこの世界には機械獣やマジンガーがあった。一体何でかしら？」

甲児とさやかは揃って首を傾げた。確かに妙である。甲児達の元居

た地球と此処ミッドチルダ。一見すると全く接点の無い二つだが何故かその世界で暴れまわる機械獣、嫌機鋼獣。そして聖王教会地下深くに封印されていたマジンガーZ。益々謎が深まるばかりであった。

「そう言えばさあ、他のロボットは何処行つたんだ？例えばグレートとかダイアナンとか」

「カリムさん、他にマジンガーZのようなロボットは無いんですか？」

さやかがカリムに尋ねた。だが、それに対しカリムはかぶりを振る。

「残念ですがその様な報告は受けておりません。今現状ではあのマジンガーZと呼ばれる質量兵器しか見つかっておりません」

「そう・・・」

少し残念そうな顔をするさやか。そんなさやかの肩にポンと甲児は手を置いた。

「なあに、俺とマジンガーが居ればどんな奴が来たって叩き潰してやれるさ」

「そうも言っていられないぞ」

甲児の言葉を否定するかのようにシグナムが割って入った。それを聞いて甲児がシグナムの方を向く。

「そりゃ一体どういう意味だ？」

「先ほど管理局上層部から連絡があつた。即刻その『マジンガーZ』とやらを引き渡せと」

「な、何だって！」

ガタンと甲児は立ち上がった。冗談ではない。その連絡は言っ
てしまえばマジンガーを取り上げるのと同じ事なのだ。
そんな事承諾出来る筈がない。

「無論、その申し出は断りましたが、このままでは強制介入される
恐れがあります」

「畜生、どうする事も出来ないのかよ！このままZが持つていかれ
るのを指を咥えてみているしか出来ないってのかよ！」

甲児はテーブルに拳を叩き付けて怒鳴った。そんな甲児の憤りを抑
えるかのようにさやかがそっと座らせる。だが、甲児の憤りは納ま
る事が無かった。

その管理局がマジンガーを欲している理由は火を見るより明らかだ。
それはマジンガーに使用されている『光子力』と『超合金Z』が目
的なのだろう。

どちらもこの世界に存在する何よりも強力な素材なのだ。

もしそれを次元航行船に使用出来れば無敵の戦艦が作れる事になる。
あらゆる砲撃に耐え、更に強力無比な砲撃を放てる無敵の戦艦。だ
が、それは甲児が許せる物ではなかった。

元々光子力も超合金Zも平和利用を目的として研究された物なのだ。
それを兵器に転用する事は夢見て死んでいった祖父が浮べれない事
になる。

絶対にさせたくない。だが、このままではどちらにしても管理局に
マジンガーが奪われてしまう。どうしたものか。そう甲児は悩んで
いた。

「それで、今こうして私達で相談していたのですが、甲児さん、ど
うでしょう。『機動六課』に入隊してみると言うのは」

「機動六課？何ですかそれは」

「これから私達が立ち上げようとしている新しい機動部隊なんです。

それで、其処に貴方達とそのマジンガーZを入隊させるのです。そうすれば管理局も手出しが出来なくなる筈です」

「本当ですか！そりゃ良いや」

正に願ってもない事であつた。これでマジンガーを手放す心配が無くなった。それだけでも甲児には有り難かつた。

「それから、シャツハから聞きました。甲児さんはデバイスについて知りたいそうですね。機動六課にはデバイスマスターと呼ばれる者も居ります。その方から色々と学ばれると宜しいでしょう」

「本当に何から何まで有難う御座います」

至れりつくせりとはこの事である。マジンガーの安全を保障してくれる上にデバイスの事について学ぶ事も出来るのだから。甲児にとつてはこれ以上嬉しい事はない。正しく今なら空を飛べそうな気持ちである。

「あのお、甲児さん」

今まで会話に参加していなかったエリオが恐る恐る手を挙げて甲児を呼ぶ。

「何だ？」

「実は、僕達もその機動六課に入隊する事になったんです」

「え？お前等が！」

甲児は驚いた。エリオもキャロもまだ10歳の年端も行かない子供である。

そんな子供が入隊出来る組織何て聞いた事がないのだ。だが、恐らくこの世界ではそれが常識なのだろう。

現にこうして離れているフェイトもシグナムもそれ程年が行っているとは思えない。

恐らく甲児と同じ位である。

「お前等分かってるのか？俺達は戦いに出るんだぞ。遊びじゃないんだ」

「分かっています。でも、僕も皆と一緒に戦いたいんです！」

「つつてもよお・・・」

「大丈夫ですよ甲児さん」

悩む甲児にフェイトが言った。

「エリオは魔力の素質があります。それにキヤロにはレアスキル『竜召還』を持っています。それに、私達が全力でバックアップしますし」

「うーん、フェイトがそうまで言うなら仕方ないかあ」

其処まで太鼓判を押されれば甲児もこれ以上言う事がない。仕方なく頷く事になった。

「ま、何にせよ機鋼獣との戦いになったら俺にドーンと任せておきな。どんなのが来たって俺とマジンガーで叩き潰してやるからよ」

「宜しくお願いします。甲児さん」

甲児とエリオはお互いそう言い合って硬く手を握り合った。それを見てさやかは横で微笑んでいた。

「何だよさやかさん」

「うーん、でも何だかエリオ君を見るとシローちゃんを思い出しちゃってね」

「そうか。実は俺もなんだ。あいつを見てると何処となくシローを思い出しちまってよ」

甲児とさやかは二人してそんな会話をしていた。

それから翌日、マシンガーンを聖王教会地下にあるドックに残し甲児とさやかはこれから共に戦う仲間達と一緒に機動六課のある場所まで行く事になった。

そして、これが今から始まる魔道士達と鋼鉄の魔神達の長い戦いの歴史の序章になるのだ。

その戦いの序章を今から君達は見る事になる。出来る事なら、その戦いの一部始終を心に留めて置いて欲しい。

若い命が炎を燃やして平和の為に戦った熱き戦いの記録を。

入隊試験（前編）

建物内では作業員が家具などを運んでいた。

どれもが新品同然の作りであり、丁寧に埃避けまでしてあった。

出来立てほやほやの新しい建物、此処こそがこれから兜甲児と弓さやかがお世話になる場所『機動六課』の隊舎なのだ。

そして、甲児はそんな隊舎の中を・・・迷っていた。

「参ったなあ・・・ちよつとトイレで用を足してる間に皆とはぐれちまった」

頭をボリボリと掻きながら辺りを見回す甲児。因みに今の甲児の服装は今までの私服ではなく管理局指定の制服に身を包んでいる。

階級は一等陸士扱いのようでその証拠に胸にはそれを表すプレートが取り付けられていた。

しかしどうやら催してきた為にトイレに行ったせい、か皆とはぐれてしまったようである。因みに当然の如くこの建物内の知識など甲児にある筈もなく、迷っている次第なのである。

「ま、適当に歩いていればその内皆に会えるだろう・・・ん！」

そう呟きながら甲児は歩いていた。するとそんな甲児の目の前に一人の女性が歩いていった。

栗色の長い髪を片方で束ねたサイドテールと言われる髪形であり、白を基調とした制服を着ていた。だが、その髪の色と長さは甲児が一番知る人物でもあった。

「さやかさん！」

「え？」

女性は振り返った。甲児は女性を見た。

「探したぜさやかさん。にしても髪型変えたんだなあ。何時ものも似合ってるけどそっちも似合ってるぜ」

「え？さやか？？あのお・・・私は・・・」

「それにしてもさやかさん、確か此処に来る前に俺と同じ色の制服を貰ってた筈なのに何でまた白い制服を着てるんだ？」

「あ、あのお・・・」

女性は困った顔をしていた。だが甲児はどうやらその女性をさやかと思い親しげに話している。

「甲児くん・・・その人誰？」

だが、其処へさやかを筆頭として同じように訪れたメンバーが其処に居た。

「あ、あれ？さやかさんが・・・二人？」

甲児はさやかと女性を互いに見合ってそう言った。

確かにさやかと目の前の女性は髪の色も長さも、そして顔立ちも良く似ていたのだ。

その為に甲児は混乱してしまったのだ。

「え？さやかさんはこっちに居るって事は・・・あんた誰？」

甲児はさっきまでさやかと勘違いしていた白い制服を着ている女性を見た。

「なのは、どうしたの？」

するとフェイトがその女性の名前を言う。

「フェイトちゃん、この人達一体誰？初めて見る人達だけど」

「うん、今から皆で八神部隊長に挨拶に行こうと思っていた所なの」

「そっか。それじゃ少し早いけど。始めまして。私は『高町なのは』って言います」

「俺は兜甲児だ。にしても本当にさやかさんそっくりだなあ。ま、俺にしては嬉しい事だけだよ」

甲児はなのはを見てニンマリする。それが気に障ったのだろう背後に居るさやかが異常なまでの気迫を放っていた。

それを見て思わず退くエリオとキヤロ。女の嫉妬は怖いのだ。

「しかし皆俺の事探してくれたのか？」

「そうよ、勝手に何処かへ行っちゃうんだもん。心配したわよ」

「いやあ、突然トイレに行きたくなっちまってよお」

「まあ・・・」

言葉が無かった。さやかは呆れるだけであつたが初めて甲児を見る者は頬を赤らめた。普通そんな大声で堂々と言う物であろうか。

其処に甲児の無神経さ、もとい図太い神経さが伺えたのであつた。

「と、とにかく・・・皆で部隊長に挨拶に行こう」

これ以上場の空気を乱されては適わないとフェイトが皆に言う。それに頷く甲児達。

こうして一同はその部隊長の待つ部屋へ辿り着いていた。フェイトが先頭に達扉をノックする。

すると扉の奥から「どうぞ」と声が聞こえた。女性の声であった。フェイトがそれに応えるように扉を開く。すると其処には部隊長を思わせるデスクに座る女性が居た。

茶色いボブカットの髪型をした甲児達と同じ制服を来た女性であった。

しかし何より甲児が驚かされたのはその女性が甲児と同じ位の年だった事だ。

「き、君が部隊長？俺と年そんなに変わんないのに凄いなあ」

「どうも。そう言う貴方が兜甲児さんやね？貴方の事は騎士カリムから聞いたとるでえ」

女性が笑いながらそう言う。

「さてと、それじゃ」

するとなのはが前に達敬礼のポーズをする。それはフェイトも同じであった。

「本日付けで此処機動六課に出向となりました高町なのは一等空尉です」

「同じくフェイト・テストロッサ・ハラウン執務官です」

二人が敬礼をしてそう言う。それを見て甲児とさやかも場の空気に合わせて同じようにポーズを取った。

「ええと、同じく本日付けで機動六課にやってきました兜甲児一等陸士です」

「同じく弓さやか一等陸士です」

「はい、ま・・・形だけのはコレ位にして・・・私は此処機動六課

部隊長を勤めてます八神はやてと言います。これから短い間やけど宜しゅうな」

「こちらこそ宜しく」

「宜しくね」

はやてが歩み寄って甲児達と握手を交わした。するとそんなはやての頭上に何かが降り立った。

「酷いすうはやてちゃん。リインも紹介して下さい」

「うわああ！ なな何だあ！」

「よ、妖精！ ！！」

甲児とさやかははやての頭上に降り立ったそれを見て大層驚いた。そりゃそうだ、何しろ目の前に居るのは約30cm位の人だったのだ。

「始めまして甲児さん、さやかさん。私ははやてちゃんの補佐をしてますリインフォー스ツヴァイと言います。リインって呼んで下さいですう」

「な、なあ・・・これって・・・やっぱ妖精なのか？」

「妖精？ リインは妖精じゃなくて『ユニゾンデバイス』ですよ」

「ユニゾンデバイス？ って事はリインもデバイスなのか？」

「そうですよお」

リインは胸を張ってそう言う。だが、それを見た甲児とさやかは目を点にしていた。これこそ正しくファンタジーな世界である。

甲児達の世界で30cmの人が存在する筈はないのだから。甲児達にとっては新鮮その者であった。

「お取り込み中の所ええやろか？」

「あ、ああ・・・どうぞ」

はやてに呼ばれて甲児は向き直った。

「それで、甲児さんとさやかさんの事なんやけど、此処機動六課では甲児くん達は管理局からの特別隊員として配属して貰う事になります、異論とかはありますか？」

「俺はないよ」

「私も同じくありません」

はやての言葉に甲児とさやかは揃ってそう言った。

「それでしたら私達は貴方達二人を歓迎します。ようこそ、機動六課へ」

はやては歓迎の言葉を発した。甲児達はそれを受け取った。

「そう言えばはやてちゃん。もうすぐ新人達の入隊試験があるんじゃないの？」

「せやった！早よ行かんと遅れてまうで」

慌てて準備を始めるはやて。それを見てなのはとフェイトが笑みを浮かべる。

だが、甲児とさやかはキョトンとしていた。

「な、なあ・・・新人の入隊試験って何だ？」

「エリオとキヤロ、そしてもう二人の新人達の試験をこれから行っんです」

「あいつらの！だったら俺達も見に行つて良いですか？」

エリオとキヤロの試験だと言うなら是非見てみたい。それが甲児の心境だったのだ。

それを聞いたはやては笑みを浮かべて頷いた。

「あ、それからその試験は甲児さんも受けて貰いますよ」

「え？俺も！何で？」

「まあ形ですから。それに多分エリオが喜ぶと思いますし」

「ああ、マジンガーを使った試験って事ね。良いぜ、腕鳴らしに丁度良いぜ」

腕を回して甲児が言う。マジンガーZを扱わせたら元の世界では甲児より上手い人間は居ないのだ。

そして今の甲児はマジンガーZを自身の手足の如く扱えるのだ。命の取り合いのない試験程度なら軽くこなせる。

甲児はそう思っていたのだ。

「マジーンGO！」

一人聖王教会に戻ってきた甲児がマジンガーの格納してある湖の上に差し掛かった。

そして叫んだ。マジンガーを呼ぶ言葉を。超人兜甲児になる為の合言葉を。

すると湖の中央に巨大な渦が起こりその中心から黒い巨大なロボットが姿を表した。

全身を超合金Zで身を固め光子力エネルギーを動力源とする無敵のスーパーロボット。難攻不落の鉄の城。マジンガーZである。

「パイルダーON！」

甲児が叫びパイルダーとマジンガーがドッキングする。パイルダーのコンソールに光が灯る。マジンガーZの両目が光り輝き両腕を振り上げて咆哮する。

今こうして兜甲児は超人兜甲児となったのだ。そんな甲児とマジンガーZの頭上に一機のヘリが姿を現した。

中に乗っているのは先ほど出会ったなのは達とさやかが乗っている。

「凄い、あれが騎士カリムが予言した古の巨人なの？」

「おつきいなあ。20mはあるんじゃないかあ？」

初めてマジンガーを見たのははやては思わず目を見開いてマジンガーを見た。大きく、そして何処か頼もしさを感じられた。

「甲児くん、マジンガーの調子はどお？」

『快調快調、問題ないぜ』

マイクを片手にマジンガーに乗っている甲児にさやかは尋ねる。それに対し甲児は満面の笑みで応える。

「それじゃ甲児くん、今から案内するから私達の後についてきてな」「あいよ」

はやての言葉に甲児は頷きヘリの下をマジンガーが歩く。歩幅が大

きいからかゆつくり歩いていてもヘリと同じ速度であった。

しかしマジンガーにしてみれば遅い徒歩でもある。それは本気で走れば余裕でヘリを追い越してしまうからだ。

そんな訳でヘリの速度に合わせてこれから入隊試験を行う現場に向かっていたのだ。

因みに向かっている道中甲児は暇を持て余していた。

と言うのもマジンガーは目標を設定すれば基本は自動で動いてくれるので操縦する必要もなく暇なのだ。

「あゝ、暇だなあ」

ふとそう呟く甲児。

パイルダー内には自分一人しか居ない。その為話す相手も居らず暇を持て余していたのだ。

プシュ！と音がしたと同時にパイルダーのキャノピーを開く。そして足を外に放り出して椅子によっかかる形で座り大きな欠伸あくびをした。

『随分と暇そうやねえ甲児さん』

「おお！何だはやてちゃんか？何だ？」

いきなり通信モニターにはやての顔が映った為に甲児は一瞬驚いた。しかしすぐに頭を切り替えてはやてを見る。

「いやな、到着するにはまだ時間掛かるし折角やから甲児さんの世界について色々と聞きたいなあと思ってな」

「何だそんな事か。良いぜ」

甲児は快く承諾した。

そして何から話そうか甲児は頭の中を整理した。

元居た世界では色々な事があった。

甲児の祖父である兜十蔵が富士山麓から新元素ジャパニウムを発見し、それを元に超合金Zと光子力エネルギーを作った。それを狙うようにエーゲ海に浮ぶバードス島を根城にしていた悪の科学者Dr・ヘルとの熾烈な戦いがあった事。

その後ギリシャ時代にバードス島に住んでいたと言われているミネネ帝国が地上に進攻を開始し、それを甲児とその兄貴分でもある男ともう一体のマジンガーで打ち破った事。

その後円盤研究に乗り出した甲児が巻き込まれた外宇宙から来たベガ星連合軍との戦いの事。

その他に白亜紀に地上を追いやられた爬虫人類が人類に攻撃を開始した際に、それを迎え撃つ為に早乙女研究所で開発されたゲッターロボが戦った事。そしてそれは一人の尊い犠牲の元に終結した事。更に頭に角を生やした鬼の軍勢が早乙女研究所を狙って攻撃を開始してきた事。その際にパワーアップしたゲッターロボが最終的にその軍勢を滅ぼした事。

其処には幾多の出会いと別れ、愛と友情、そして生と死があった。

甲児はそれらを余す事なくはやて達に話した。

その中には甲児自身も多くの仲間や恋人、そして肉親を失ったりもした。

それらを甲児は話した。話し終えた甲児はふうと溜息をついた。

それを聞いたはやては勿論、なのはもフェイトも黙り込んでしまった。

さやかもまた居た堪れない表情になっていた。

こんな話を人に話したのは恐らく初めてだろう。そう思いながら甲児は通信モニターに映るなのは達を見た。

「甲児さん・・・元の世界でそんなに苦勞をしてたんですね」

「何だか、今まで見てきた甲児さんからはとても想像出来ませんでした」

「せやなあ、ホンマに甲児さんは強いなあ」

三人が甲児の心の強さに賞賛を与えた。それを聞いた甲児は何処か恥ずかしくなったのか鼻っ柱を掻いた。

「お、おいおい、何もそんなに褒めるこたあねえだろう？大した事じゃねえよ。そんじゃ今度はそっちの思い出を話してくれよ」

甲児がなのは達に聞いた。彼も興味があるのだ。この世界に、そしてこの世界に住むなのは達に。

「ええと・・・何処から話そうかなあ」

なのはが困った顔で頬を掻いた。苦笑いを浮かべているが甲児にはその顔の裏には悲しい過去があった事に感づいた。恐らくそれを話すのは本人も辛い筈だ。

「あ、折角だけどやっぱ別の話が聞きてえや」

即座に甲児は話題を変えた。これ以上湿っぽい話は勘弁願いたいのだ。

「えっと、それじゃ何を聞きたいんですか？」

「ズバリ、なのはちゃん達のスリーサイズ！」

ズガン！そんな音が通信機一杯に響き渡った。見ると甲児の言い放った言葉にさやかとはやて以外の者。つまりなのはとフェイトが思いつきりずっこけたのだ。あ、今パンツ見えた。等と思いながら甲児はモニターを見た。

「な、何でいきなりそうなるんですか！」

「だあって気になるじゃん。俺だって男の子だよ。ちゃんと付いてる物についてるんだから気になる物は気になるんだよ」

何ともどうでも良い理由である。それを聞いてなのはもフェイトも呆れ果てていた。その隣でさやかは額に手を当てて深い溜息をついていた。それで我等がはやてはと言うと。

「なのはちゃんのスリーサイズはなあ。上から『わあああああああああ！』むぐう！」

何と甲児に向かってなのはのスリーサイズを暴露しようとしたのだ。それをなのはが顔を真っ赤にしなごらはやての口を塞いで制する。モニターの奥ではなのはのスリーサイズを聞けなかったのが余程悔しかったのか甲児がチツと舌打ちしながら指を鳴らしていた。

「甲児くん」

「ん？」

そんな甲児をさやかがモニター越しに見ていた。気のせいか笑っているようだが顔が全然笑ってない。寧ろ何か怖い。そんな気がしてきた。

それ位の気迫がモニター越しに伝わってくるのだ。

「後で覚えて為さい。たっぷり油を絞ってあげるから」

ビクッ！

思わず甲児は身震いした。

何時もながらさやかを怒らせると自身の寿命が縮む思いがする。果たして俺は明日の朝日を拝めるんだろうか？

思わず心配になる甲児であった。

そうこうしている内に試験場と思わしき場所まで辿り着いた。
所所崩壊したビルが立ち並ぶ廃墟となった場所である。

此处がその試験場なのだろう。

見るとビルの屋上に見慣れた二人が居た。

エリオとキャロである。

「甲児さぁーん！」

マジンガーズ、兜甲児に向かってエリオが手を振る。

それに応えるように甲児とマジンガーズも手を振ってそれに応えた。

「よぉ、エリオにキャロじゃねえか。にしても何だその格好？」

甲児は今の二人の服装に疑問を感じた。

と言うのもはじめて見た時の格好とは違いエリオは赤いスーツと白のジャケットを身に纏っておりキャロは髪の色と同じローブのような服を着ている。

そしてエリオの手には一本の槍のような物が握られていた。

「甲児さん、これはバリアジャケットって言って今甲児さんが身につけているスーツみたいな物なんです」

「へえ、そうなのかぁ」

マジマジと甲児は二人のバリアジャケットを見た。

どう見ても只の服にしか見えない。

それでも多少の魔力攻撃などから身を守ってくれるそうなのだ。

「しかしこの世界は俺達の世界より優れているのか劣っているのか
分かんねえなぁ」

甲児がそう呟いた。

確かにバリアジャケットやデバイス。その他の魔法を使った技術などは突出してはいるがマジンガーなどの巨大ロボットを作る技術には完全に劣っているのだ。

何とも微妙な話である。

「それはそうと、お前等これから試験なんだろう？」

「はい、僕達の他に後二人が試験を行うんです。でも、最初はまず僕達ですね」

自身を指し示してエリオは言う。

するとマジンガーと同じ顔の高度までヘリが降下してきた。

「二人にはこれからターゲットドローンを投下するからそれを撃墜してね」

そう言うのと二人の目の前に突如として丸い球体の小型の物が数機現れた。

何だ、いきなり出てきたぞ！

形は楕円形でありそれがフワフワと空中に浮いているのだ。

数は10機以上は居る。

それらが二人の回りに居るのだ。

「二人はデバイスの試運転と魔力コントロールの試験みたいな物だけど油断しちゃ駄目だよ」

ヘリの中に居るなのはが二人に釘を刺す。

それに二人は頷いた。

そして試験開始のブザーが鳴る。

それと同時にターゲットが一斉に動き出す。

二人と一定の距離を取りながら真ん中にあるレンズからレーザーと思わしき物を放つ。

エリオは即座に動いてそれをかわし、キャロは結界を張りそれを防ぐ。

「うおおおおおおおおお！」

槍を持ち雄たけびを挙げて薙ぎる。

槍の刃が風を切り音を立てて周囲に居たターゲットを真っ二つに切り裂いた。

裂かれたターゲットは残骸となり散っていく。

その下ではキャロの身につけていたグローブのような物が光だしていた。

かと思うと彼女の肩に乗っていたフリードの口から赤い光球が放たれる。

それらはターゲットを焼き尽くしていく。

すげえ、本当にこの世界ってすげえなあ。

マジンガー越しから甲児は驚かされていた。

二人共試運転と言うのにまるで使い慣れたかのように次々とターゲットを撃破していく。

やがて、試験終了のブザーが鳴り響いた。

二人の肩が僅かに小刻みに揺れているのが見えた。

乱れた呼吸を整えているのだ。

「お疲れ様。二人の試験は此处までです」

「はい！」

フェイトの言葉にエリオは返事をしてキャロは静かに頷く。

どうやらまだ口は聞けないようだ。

しかし一体何故キャロは喋れないのだろうか？

少し甲児は気になった。

「さ、次の二人の試験だね」

「お、もう始まるのか」

だが、今は試験だ。

甲児はマジンガーのモニターから映る次の二人を見た。

今度は二人共女性であった。

年は甲児より三つか四つ位下の少女達である。

青い髪に鉢巻を巻き、右手には黒のガントレット状の物を嵌めて口
ーラーブーツを履いている。

その隣にはオレンジ色の髪を両端に束ねた髪型で両手には手作り制
と思われる拳銃が握られていた。

どうやらこの二人が次に試験を行うのだろう。

甲児は興味しんしんにそれを見た。

「なあ、あの二人がこれから試験をするのか？」

「はい、スバル・ナカジマ二等陸士にティアナ・ランスター二等陸
士の二名です」

なのはが二人の名前を甲児に教えた。

「スバル、あんま暴れてると試験中にそのオンボロローラー壊れるわよ」

「うえ！ティア、酷い事言わないでよー！ちゃんと油差してきたから大丈夫だよー！」

ティアナに言われた事にスバルは苦い顔をして返し言葉を言う。

それに薄い反応をしながらティアナは時計の時間を見た。

すると二人の前にリインの映ったモニターが現れる。

『おはようございます！スバル・ナカジマ二等陸士とティアナ・ランスター二等陸士のお二人様。今回の試験内容のご説明を致しますね』

モニターに映ったリインが二人に試験の内容並びに確認を手早く伝える。

それを聞いた二人は頷き試験が開始されようとしていた。

その光景をなのは達、そしてさやかと甲児は二人の成り行きを見ていた。

「へえ、期待の新人って奴か」

「お手並み拝見ねえ」

さやかも楽しみそうな笑みを浮かべて甲児は腕を手回してそれを見ていた。

その隣には何時の間にか乗ったのかマジンガーのパイルダー内にエリオとキャロも乗っていた。

どうでも良いが、凄く狭いんだよね。

甲児は頬を掻きながら思っていた。

そんな一同が見守る中、二人は試験スタートのゴングを待っていた。目の前のシグナルが三つ浮び、それが一つ消える。

二つ消える。

そして・・・三つ目が消えて目の前に開始の文字が見えた。

「ゴオッ!」

二人同時に声を挙げて駆け出す。

ビルとビルの間を距離をティアナのアンカーガンに装備されたワイヤーで飛び、ティアナは外へ、スバルは中へ入っていく。

室内に入ったスバルは狭い通路の中を駆け抜けながら次々とターゲットを落としていく。

ティアナは外で非撃墜ターゲットを避けながらターゲットを狙撃していく。

その腕前はかなりの物であった。

それを見た甲児が思わず口笛を鳴らす。

「へえ、あいつらやるじゃねえか!かなりのコンビネーションだな」

「でも、難関はまだまだこれからなんですよ」

「へえ、どんなのがあるんだ?」

モニターに映ったフェイトの言葉に甲児が興味深そうに尋ねる。

するとマジンガーのモニターにある映像が映し出された。

それは丸い球体状の巨大なターゲットであった。

「これのお陰で受験者の半数が脱落するの。二人がこれをどう切る抜けるか見物だよ」

「こんなサッカーボールもどきでねえ・・・そんなにすげえのか?」

甲児もそれには疑問に思えた。

見れば見るほど蹴り易そうそつな球体である。

「完全防御に加えて二人が苦手な中距離射撃能力も持つてるんや」
「そりゃ厄介だなあ。あのサッカーボールもどき」

どうやら甲児の中ではそれがサッカーボールと言う事で定着したらしい。

そして再び二人に目を移す。

其処で二人は橋と橋の間にあるターゲットを撃破し終わった時であった。

「やったあ！上手く行つたねえ！」

「当然」

スバルが喜んで言い、ティアナが当然とばかりに言う。

そして次のターゲットに向かおうとした時、ティアナはスバルの後ろに残っていたターゲットを見つけた。

先ほどの戦闘の際に巻き上がった煙で隠れて見えなかったのだ。

「スバル！防御！！」

「へ？」

言うよりも早くティアナはスバルを突き飛ばす。

それと同時にターゲットから攻撃が放たれる。

うわわ！まだ居たの？

完全に油断していた為にスバルは対応に遅れた。

そんなスバルを庇うようにティアナが動き回ってターゲットを狙撃しようとした。

だが、その際に瓦礫に躓き、足を挫いてしまい転倒してしまった。

「くうっ！」

足の痛みに耐えながらターゲットの攻撃をかわし撃ちぬく。
だが、その際に試験状況をモニターしていたモニターに誤射してしまい試験を見ていたフェイト達のモニターには砂嵐になってしまった。

「あれ？どうしたの？」

「モニターに流れ弾があたったのかな？」

さやか問いにフェイトが答える。

そして砂嵐は甲児達にも同じであった。

「ありや？急に映らなくなっちゃった」

「モニターに被弾したんでしょうか？」

「何にしてもこれじゃ見えねえや。折角だしゴール地点に先回りしようぜ」

甲児はそう言ってマジンガーを動かして試験のゴール地点に歩いていった。

その頃、スバルとティアナは橋の地点に居た。

「ティア、大丈夫？」

「大丈夫・・・つつ！」

起き上がろうとしたがその際に挫いた足の痛みのせいで再び地面に膝をつく。

「ティア・・・もしかして足を！」

「これじゃ最終関門は抜けられない・・・後ろでバックするからあんただけゴールしなさい。私は・・・次で行くから」

「次って！半年も先じゃない！」

「うつさい！足手まといが居ない方がこっちとしては楽なのよ！だからあんただけで・・・」

「嫌だ！」

ティアナの言葉にスバルは頑として言葉を放つ。

「私のせいでティアの夢を邪魔するなんて嫌だ、だから一緒に合格したいんだよ！」

「じゃあどうしろって言うの！動けないボックスを引っ張って二人で合格出来る方法なんてあるの！」

「裏技がある・・・かなりキツイし、反則で減点取られるかも知れないけど・・・」

提案を出したは良いが、その後スバルは指を目の前で押し合って言い渋っていた。

そんなスバルの姿を見たティアナが苛立ち、スバルのジャケットを掴み挙げる。

「まったくイライラするわねえ！あんたどうせ無理矢理引っ張るんですよ！で、どうするのよ！」

「・・・二人でやろう！二人なら絶対出来る！」

スバルが強い瞳でティアナを見る。

それを見たティアナは暫し沈黙した結果。

「プランはどうするの？」

「ああ・・・うん！」

ティアナの返答を聞いてスバルの顔がパツと明るくなる。

ヘリの下の道路をティアナは一人走っていた。
それを見つけたさやか達がその姿を見る。

「あれ？ティアナちゃん一人？スバルちゃんは何処だろう？」

「さやかさん、あれはフェイクだよ」

「え、フェイク？」

フェイトの言葉にさやかが首を傾げていた。

そんなティアナにターゲットドローンの攻撃が直撃した。
かに思えたが煙が晴れた時其処に姿は何処にも無かった。

「え？消えた！」

「あれは、多分フェイクシルエツト。Ｃランクであれを使えるなんて凄いわね」

「そんなに凄いの？」

「うん、あれは相当魔力を使うからＣランクであれを使うのはかなり厳しいんだ」

フェイトが言う。

そんな一同の前でティアナの姿をしたフェイクシルエツトが何体も現れてきたのだ。
それを見たさやかは一瞬ギョツとした。

え？これって分身の術？

思わずそう思えた。

日本にある忍者が使ったとされる忍法の一つでもある。

だが、それが事実かどうかは未だに謎な部分も多い。

そして、それを放っているティアナ本人は瓦礫を背にしていた。

その顔はとても苦しそうである。

「これ結構魔力使ったから・・・一発で決めなさいよね！」

『任せて！』

お互い念話で言い合う。

その頃スバルはビルの上からターゲットの居るであろう個所を見
ていた。

「私は、空も飛べないし、ティアのような狙撃能力もない、それに・
・私にはあんな力もない」

スバルの脳裏に浮ぶ光景。

それは紅蓮の炎の中自身を見つめる巨大な魔神の姿であった。

炎を背にしている為姿はハッキリとは見えなかったがその力強さは
充分に伝わっていた。

「だから、私に出来る事は力一杯走るだけ！ウインググロオオオオド
！」

魔方阵を展開させたスバルが地面に拳を叩きつける。

すると其処から青いレールが敷かれていく。

それは真っ直ぐにターゲットの居るビルに突き刺さった。

ターゲットもそれに気付き警戒態勢を取るがフェイクシルエットの
妨害が入り体制を取れないでいた。

スバルはその隙を突くようにロードの上を高速で駆け抜けていく。ビルの壁を突き破り、目の前に居たターゲットに拳を叩きつける。

「うおおおおおおおおお！」

叫び尚も拳をぶつける。

だが、結界は硬く中々破れない。

埒が明かないと判断したスバルが一旦距離を開けるとカードリッジを数発ロードした。

足元に巨大な魔方阵が展開される。

「一撃！必倒！！」

構えを取り気合を入れる。

ガントレットのタービンが回転し目の前に巨大な魔力が収束される。

「デイバイイイイン・バスタアアアアアアア！！！」

叫びと共に巨大な魔力砲が放たれた。

それはターゲットを飲み込みやがて消滅させた。

「よし・・・ティア！」

ターゲットを片付けたスバルは急ぎティアナの元へ向かう。

残り時間は後僅かであった。

その頃、リインはゴール付近で二人の到着を待っていた。
ゴール手前にはターゲットが一機残っている。
そしてその上空にはなのは達を乗せたヘリも飛んでいた。

「あ、来ましたあ！」

リインの視界に二人の姿が映る。
スバルがティアナを負ぶって道路の上を高速で駆け抜けている。
ズダン！

ターゲットが撃ち抜かれた音であった。

ティアナが背負われながらターゲットを撃ち抜いたのだ。

「魔力・・・全開！！」

最後の力を振り絞りスバルはゴール目掛けて一直線に走っていく。
だが、この時スバルは大事な事を忘れていた。

「ちょ、ちょっと！止まる時どうするか考えてるの？」

「え！・・・あ！」

そう、停止する際の事を全く考えて居なかったのだ。

「あ、ちょっとヤバイかもですう」

リインが身の危険を感じ上空へ避難する。

「あのままだとあの二人瓦礫に激突するんじゃない？」
「そうかもね。とりあえず処置を施しておかないと」

なのはがそう言つて外に出ようとした時であつた。

それは正に二人が瓦礫に激突しそうになつた刹那の出来事である。
突如として瓦礫が崩壊したのだ。

そして二人の足元が無くなつてしまつたのだ。

「え、ええええええええええ！」
「足場が・・・何でえ！」

信じられないと言つた顔で二人は見る。
その時であつた。

上空に投げ出された二人の下から巨大な黒い腕が競りあがつてきたのだ。

それは投げ出された二人を優しく手の上に乗せそのまま道路の上にそつと置く。

まだ状況が掴めてない二人はキョトンとした顔をしている。

「こ・・・これって・・・」
「巨大な・・・腕？」

二人が乗っていたのは正しく巨大な腕であつた。

「やれやれ、随分無茶するんだなお前等」
「「え？」」

二人が声のした方を見た。

其処には腕の持ち主である鋼鉄の巨人が立っていた。

「「うわあああああああああああああああ！」」

それを見た途端二人が絶叫しだす。

「な、なな何で此処に機鋼獣がああああ！」

「てい、ティア！早く何とかしないと！」

「無理言わないでよ！Sランクでも倒せない機鋼獣にCランクのあたし達が適うと思ってる訳？」

どうやら自分達を助けた巨人を見て二人はパニックに陥っているようである。

「おい、お前等これは機鋼獣じゃねえぞ」

どうやら機鋼獣と間違われたのか甲児は心外そうな顔をしてキャノピーを開く。

二人は開かれたキャノピーの中から現れた男性を見た。

甲児は既にヘルメットを外しており黒い髪を特徴的な眉毛とモミアゲが見える状態にして二人を見ていた。

「よお、危なかったな」

「えつと・・・貴方は？」

「もしかして、さっき私達を助けてくれた人ですか？」

スバルとティアナは甲児を見てそう尋ねた。
それに甲児は頷く。

「二人共お！」

するとそんな二人の元へリインが降りてくる。

かなりご機嫌斜めである。

「二人共無茶のしすぎですう！怪我したら元も子もないですよ！」

かなりプリプリしていた。

だが、姿形のせいかなぁんまり怖くない。

それどころかティアナは聞こえない声で「小さっ」と呟くほどであった。

「さてと、んじゃ次は俺の番だな」

スバルとティアナの試験が終了したのを見た甲児は次は自分の番だと言い張り腕を鳴らし始める。

キヤノピーを閉じ甲児はマジンガーを動かして自身のスタート地点に向かって歩いていく。

そんなマジンガーの後ろ姿を二人は見ていた。

「あれが・・・聖王教会の地下で見つかったって言う・・・確か・・・」

「マジンガー・・・だったっけ？」

ティアナが呟きスバルが名前を言った。

「にしても良く聖王教会にあんな質量兵器を置いておけるわねえ。

上の連中は知らないのかしら？」

「知ってるですよ。でもマジンガーじゃないと機鋼獣に勝てないから仕方なく承諾してるんですう」

ティアナの疑問にリインが答える。

それに納得する二人であった。

入隊試験（後編）

「さあて、いよいよ俺の番だな」

待ちくたびれたように甲児は腕を鳴らす。マジンガーは既に指定された地点に陣取っている。

その上空をなのは達の乗ったヘリが飛行している。勿論中には先ほど試験を行った四人も乗っていた。

「あれがマジンガーZ・・・機鋼獣を倒し、拠点を開放したって言う古の巨人・・・」

ティアナがマジンガーを見てそう呟いた。

現時点で魔道士達にとって拠点を開放する事はおるか機鋼獣を倒す事すら出来ない状況なのだ。

「ミッドチルダのおよそ80%を奴等に占領されてから、初めて嬉しいニュースが舞い込んで来たって感じだな」

はやてがそう言って目の前にモニターを展開させる。

其処にはミッドチルダの全体図が映っていた。

だが、それは首都クラナガンを中心として丸い楕円が書かれており、それ以外が真っ赤に塗られていた。

「はやてちゃん、もしかしてこの赤いのって・・・」

「せや、機鋼獣に制圧された区域や。私等魔道士じゃどうにも出来へん領域なんや」

悔しそうにはやては言う。

さやかもその映像を見て戦慄を感じた。

この世界が此処まで追い詰められていたなんて……。

正直マジンガーZだけでこの状態を覆せるのか不安になってきた。

「よお、さつさと始めようぜ」

見るとマジンガーZが試験開始を今か遅しと待ちわびていた。
準備万端のようだ。

「そうだね、それじゃ早速試験を開始するよ甲児さん」

フェイトは言いモニター脇にあるボタンを押す。

するとマジンガーの周囲に転移魔法が掛かりその周囲を取り囲むかのように数体の球状の物体が現れたのだ。

だが、大きさは先ほどスバル達が戦った時より数倍大きい。

だが、それでもマジンガーの方が大きいのは変わらない。

「試験内容は今出てきたガジェットドローン総数100体を20分以内に撃破して貰います」

「なんでえ、結局相手はサッカーボールかよ。まあ、軽く蹴散らしてやるか」

甲児が腕を鳴らして操縦桿を握る。

ヘリの中に居たメンバーはマジンガーの性能を見るためにモニターに釘付けであった。

「ねえ、フェイトちゃん。フェイトちゃんはマジンガーの性能を見ただよね」

「うん、正直言ってミッドチルダであれだけのロボットを作れる様になるのは恐らく100年先かも知れない」

「そんなに凄いか？あの・・・マジンガーってのは？」

フェイト以外の二人がマジンガーの性能に少し疑いを持っていた。何しろ最強の魔道士であるのはやフェイトでさえ苦戦したと言われている機鋼獣をあのマジンガーは大した苦戦もなく蹴散らしたと言っているのだ。

それが未だに信じられないでいたのだ。

そんな一同の前でスタートのブザーが鳴り響く。

それと同時にマジンガーが目の前の数体のガジェットドローンに向かって豪腕を振り切った。

全長18mはあるマジンガーの豪腕が軌道上に居たガジェット達は瞬く間に爆破し塵と化した。

たった一撃で20機は撃ち落されたのだ。

「甲児くん、折角だから武装のテストも行ってみたら？」

「それもそうだな・・・ようし！」

マジンガーはガジェットの囲いから逃れる為に上空にジャンプした、そして前方に全機が見える位置に降り立つ。

「まずはこれだ！」

甲児がボタンを押す。

するとマジンガーZの両目が輝き其処から閃光が放たれる。

その閃光は斜線上のガジェットドローンを貫きそのまま斜線上にあったビルを粉碎、嫌、切断・・・即ち焼き切ってしまったのだ。切断されたビルの面は赤く変色していた。

更に多くのガジェットドローンが撃破されていく。

「締めはこいつだ！」

最後に残ったガジェットドローンに対しマジンガーの口から猛烈な突風が放たれる。

ルストハリケーンだ。

それを浴びた殆どのガジェットドローンが錆びてボロボロになってしまった。

正にあつと言う間であつた。

100体居たガジェットがマジンガーの前で1分も経たずに蹴散らされてしまったのだ。

その光景にさやかとエリオ達、そしてフェイトを除く殆どのメンバーが驚きの眼で見っていた。

「凄い・・・大型ガジェットドローンがああもあつさり倒されるなんて」

「しかも・・・1分も掛かってないやなんて・・・」

驚愕であつた。

「機鋼獣の性能を劣化させて作られたガジェットドローン。魔力防御装置として中型AMFが内臓されていて魔道士であれを相手にするのはSランク級でないととても適わない相手を・・・」

「って、言うか・・・今のあのマジンガーの放った物は一体何ですか？」

「ああ、光子カビームとルストハリケーンって言うのよ。マジンガーに内臓されている光子力をエネルギーとして放つ武器なの」

さやかが皆に説明する為にモニターを展開する。

其処にはマジンガーの姿が映っており半分は機械面がむき出しになっていた。

「光子力ビームはそのままの意味で光子力をビームに変換して放つ物。それでルスとハリケーンは強力な酸を含んだ突風を浴びせる技よ。多分アレ位の装甲なら風化させるのに5秒は掛からないかもね」
「な、なのはさん・・・これって・・・質量兵器なんじゃ!」

スバルが真っ青になってなのは達に尋ねた。
それになのはは頷く。

「そうみたい・・・でも、光子力なんてエネルギー聞いた事ないけど」

「計測してみたけど、地球であつた原子力エネルギーの数倍・・・ううん、それ以上は行くみたいやで」

「ミッドにあるエネルギーでもあれと肩を並べられるエネルギーは・・・無いみたい」

はやてとフェイトも光子力を見て改めてその凄さを実感していた。
常識が通じないとはこの事である。

目の前に立つマジンガーZは言ってしまうえば危険物質の塊なのだ。

「まるで、動くロストロギアですね」

「ロストロギア? ねえ、それって何?」

初めて聞く単語にさやかが首を傾げた。

「ロストロギアって言うのはですね。異なる異世界で作られた超文明の事です。物によっては次元崩壊を起こす大変危険な物でもあるんです」

「それが、マジンガーのことを指すの?」

さやかはマジンガーZを見た。

まさか元の世界では平和の守護神であったマジンガーZが此処では危険物質、ロストロギアにされてしまうとは。何とも因果な話である。

その視線の先では残骸すら残らなかったガジェットドローンの前でマジンガーは静止しておりその中で甲児は腕を頭の上に組んで座っていた。

「ああ・・・腹減ったなあ」

試験を終えた甲児がそう呟いていた。

そんな時であった。

突如としてヘリの中に警報が鳴り響く。

「これって・・・シャーリー！」

「廃棄都市近辺に大型質量反応！機鋼獣です！」

「数は？」

「3体機影があります！」

レーダーには大型の機影が3機其処にあった。それが真っ直ぐこちらに迫ってきている。

「へん、丁度物足りなかった所だ！軽く蹴散らしてやる」

すると甲児のマジンガーZが其処へ向かう。

マジンガーの前には3体の機鋼獣が其処に居た。

そのどれもが甲児の中で見た事のある機鋼獣であった。

両腕に鉄球を装備し頭に炎を纏った形の機鋼獣。

四速歩行で額に巨大な角を生やした機鋼獣。

そして全体がバラバラになった体が辺りを飛行して飛びまわっている機鋼獣が其処にいた。

「ちつ、よりによつて飛行型かよ！」

甲児が愚痴った。

今のマジンガーには相性の悪い相手である。

分かっていると思うが今のマジンガーはスクランダーを装備していない。空を飛べないマジンガーにとって飛行型機鋼獣との相性は最悪である。

「だからつて此処で引き下がれるか！」

甲児が叫び機鋼獣軍団に向かって走る。

鉄球をつけた機鋼獣が両腕の鉄球を振り回してマジンガーに向かってそれを放つ。

その鉄球をマジンガーが両腕で絡ませて掴み取る。

お互いが鎖を引っ張り合う。

すると額の炎をマジンガーに吹き付ける。

あちち！俺を丸焼きにする気かこいつ！。

顔を歪めて甲児が愚痴る。

そんなマジンガーの背後に向かって角を有した機鋼獣が突撃しようとしていた。

「甲児くん！後ろ！」

「んなろお！串刺しなんざ御免だぜ！」

大事なマジンガーを串刺しにされたら溜まった物じゃない。そう判断した甲児は再びマジンガーを空高くジャンプさせる。その際に鉄球をつけた機鋼獣が前に押し出され機鋼獣と串刺し状態になった。バラバラになった機鋼獣が一体になり胸部から超音波砲を放とうとしていた。

だが、それよりも早くマジンガーが2体の機鋼獣を叩きつけた。叩きつけられた機鋼獣がもつれるようにその場に落下する。

「ようし、トドメだ！」

マジンガーは鎖を引き千切り両腕を天に翳して仁王立ちし、胸の放熱板から猛烈な熱線が放たれる。

放たれた熱線、プレストファイヤーが3体の機鋼獣を包み込み、やがてドロドロの液状に変化させてしまった。

ヘリが辿り着く頃には既に戦闘が終了していた時であった。

「へっへえ、機鋼獣なんざ楽勝よお！」

甲児が腕を回して余裕たつぷりに言った。

「凄い、凄い！あのマジンガー2つて凄い強いんだねえ！」

「数の差を覆した・・・機鋼獣を相手に」

スバルはマジンガーの強さに感動しておりティアナは言葉を失っていた。

「胸から放たれてる熱線・・・推定温度は・・・数万度！」

計測して出た熱量になのは達は度肝を抜かれた。

良くこんな恐ろしいロボットを製造出来た物だと思えた。

「あゝあ、腹減ったなあ・・・おうい、試験終ったんだろう？さつさと飯にしようぜえ！俺もう腹ぺコだよお」

だが、そんな恐ろしいロボットの中から聞こえたのはすっかりうな

垂れた甲児の姿と声であつた。

「まあ、甲児くんったら緊張感無いんだからあ！」

そんな甲児を見てさやかが溜息を漏らす。

「ぷっ！」

「あはは！」

それを見た一同の緊張の糸がフツと緩み皆大声で笑い出す。
皆が実感したのだ。

このマシンガーは自分達にとってとても心強い味方なのだと。
そして、兜甲児も同じであると言ふ事を。

「フン、流石はマシンガーといったところか・・・」

モニターには先ほどの機鋼獣を蹴散らしたマシンガーの映像が映し
出されていた。

それを男女が見ていた。

自身の手駒が倒された。にも関わらずその表情はとても嬉しそうで
あつた。

それもそうであろう。彼にとっては待ち焦がれた強敵なのだ。

ミッドチルダの支配も大方終っており、後は首都を落とすだけであつた。

そんな時に訪れた強敵。その出現を何よりも喜んでいたので。

「しかし、所詮は機械人形。マジンガーに奴が乗らなければ奴も只の人間・・・となれば、こいつらの出番か」

男女は振り返った。

其処には青いスーツを身に纏った12人の少女達が立っていた。

「お前達に指令をやろう。この男を・・・兜甲児を殺せ！」

男女がモニター一杯に表示した男、兜甲児を指差す。

それを見た少女達の瞳がとても怪しく光っていた。

もう一人の転移者

入隊試験を終えた四人はなのは達の元に集められた。

勿論其処には甲児も居る。

一応形だけだと言われているがとりあえず結果を聞くだけ聞く事にしたのだ。

エリオとキャロについては特に問題は無かったのだが、問題はその後二人である。

ランク以上の魔法の使用、危険行為、減点対象と思える行為をしたのだ。

「それで、二人の結果だけど・・・残念だけど二人共不合格です」

「・・・・・・・・」

なのはの厳しい採点に二人は黙り込んでしまった。

しかし、其処でなのははニツと笑った。

「でも、二人をこのままCランクに留めておくのは勿体無いから、はい」

そう言っただけなのはが二人に手渡したのは転属届けであった。

其処でミツチリしごかれた後に再び試験を行えばランクアップが出来ると言っただけ。

「良かったじゃねえか二人共」

甲児が二人に対してそう言ってあげた。

すると、今度はなのはが甲児の方を見た。

「それで甲児さん、マジンガーの武装なんですけど、今後はその武装もリミッターをつけさせて頂きます」

「うえ！何でえ？」

「試験と戦いの時に見せて貰いましたが、あれだけの力はハッキリ言って危険過ぎます。下手したら町に多大な被害を被ってしまうかも知れないんです。それに、マジンガーだったら格闘戦でも充分機鋼獣に対抗出来そうですし、危険と思ったらその時点で臨機応変にリミッターを解除していきますので」

「なるほどなあ・・・分かった」

甲児も納得した。

確かにマジンガーの武器はどれも危険な物が多い。

特にルストハリケーンやブレストファイヤー等を市街地で使えば被害は相当な物になりかねないのだ。

其処へ行くとなのはの判断は妥当であつたと思える。

「それじゃ、これにて報告は終了。お疲れ様」

なのはが資料を纏めてそう言った。

それから甲児とさやかは草の生い茂った場所で寝転んでいた。

「やれやれ、これからちと面倒な事になりそうだなあ」

「そうねえ、マジンガーの武装も一部使用不可にされちゃったからねえ」

「確か・・・ルストハリケーンとブレストファイヤー、後光子カビームもか」

「ドリルミサイルとミサイルパンチも駄目よ」

「だとすると、普通に使えるのはロケットパンチだけか。まあそれだけ使えれば問題は無いか」

甲児が空を見ながら呟いた。

何はともあれこれでマジンガーが管理局に持っていていかれる危険性は回避できたのだ。

多少肩身の狭い思いをしなければならないのはこの際我慢するとしてよう。

そんな事を甲児が思いながら寝転び空を見上げる。

フツと、そんな甲児の視線に二人の顔が映った。

ティアナとスバルである。

「えっと・・・貴方があの時マジンガーZってのを操っていた人ですか？」

スバルが問う。

甲児は起き上がって二人の方を見直す。

「ああ、そうだけ。君達が今度機動六課に転属する事になった二人だろう？さっき会ったばかりだけど・・・」

「はい！これから短い間ですが宜しくお願いします。スバル・ナカジマ二等陸士と・・・」

自身の名を名乗ってからスバルはチラリと隣を見た。

「同じく、ティアナ・ランスター二等陸士です。宜しくお願いします」

「な、何かツンツンしてるなあ」

甲児が苦笑いしながらティアナを見た。

確かにスバルがオープンな性格なのに対しティアナは少し甲児から距離を置いているようにも見える。

「ハッキリ言わせて貰います。私は貴方の力、そのマジンガーと言う物を認めるつもりはありません！」

「いきなりだなあ」

「無礼なのは承知してます。ですが、私達は今まで魔法を使って戦って来たんです！今更質量兵器に頼る戦い方は納得できません！」

ハッキリとティアナは言い放った。

それを聞いた甲児は反論する言葉が出なかった。

確かに言ってしまうえば甲児達は異世界から来た余所者なのだ。

中にはこう言った連中も居ると自覚はしていた。

だが、そんな人間がこんなにも身近にいたとは驚きではあったが。

しかしそんな事を言われて黙ってる甲児でもない。

「じゃあ何か？俺がしてきたのは無駄な事だったって言いたいのかな？」

「甲児くん」

さやかに言われて甲児はハツとした。

つい熱くなってしまった自分に反省しつつも二人を見る。

スバルはオロオロしておりティアナは未だに毅然とした態度で甲児を見ている。

二人は只静かににらみ合っていた。

だが、それを先に打ち切ったのはティアナであった。

「ですが、機鋼獣に対抗出来ないと言うのは悔しいですが事実です。仕方ないですのでその時だけ（・・・）は当てにさせて頂きますので他の任務の際には手出しは無用と思っていて下さい」

そう言ってティアナは一人歩き離れていった。

「何だアイツ？」

甲児は眉を顰めた。

余り良い印象は持てないのは事実でもあった。

「すみません、普段のティアはあんなじゃないんですけど・・・
本当に御免なさい」

変わりにスバルが謝っていた。

そんなスバルに甲児がそつと手を翳す。

「良いよ、あいつの言い分もまあ分かるしさ。確かに今まで苦労してたのを俺が来たお陰で全部無駄にされちまうって思ったら反論もしたくなるしな」

甲児は笑顔で言った。

数年前の自分だったら更に売り言葉に買い言葉であつただろう。

そんな事を思いながらさやかは見ていた。

「でも、この世界ってのは魔法が主流なんだな？見た所実弾兵器とかは無かつたし」

「はい、この世界では魔法至上主義ですから。質量兵器は禁忌的^{タブー}な扱いになつてゐるんです。ですから中にはマジンガーを毛嫌いしている人達も居るんです」

「成る程なあ」

納得出来るような出来ないような心境の甲児であつた。

「要するにこの世界じゃマジンガーは邪魔者みたいだな」
「そんな事無いですよ！」

甲児の呟きにスバルが反発した。
その目は真っ直ぐに甲児を見つめていた。
綺麗な緑色の瞳が甲児には見えた。

「あの時甲児さんが居なかったら今頃私達生きてたかどうかさえ難しいんですよ！Sランクの魔道士でさえ機鋼獣一体を追い返すのがやっとなのにそれが一度に3体も出た時には私正直この世の終わりかと思つた程ですから！」

「幾ら何でも大袈裟過ぎないか？」

「大袈裟じゃありません！あんな巨大な怪物、しかも魔法の効かない化け物に私達はどうやって戦えば良いんですか？」

「うーん」

真剣な目で言ってくるスバルに甲児もさやかも答えようが無かった。
そんな二人に尚もスバルは続ける。

「けどそんな時に貴方達が来てくれたんです！あの化け物と同じ様に巨大な・・・ええと・・・魔神を操って化け物を倒した時なんて鳥肌が立ちましたよ！甲児さんは厄介者でも邪魔者でもないです！私達の希望なんです！」

「希望か・・・有難うよ。それを聞いたら何だかさつきまで悩んだ自分が馬鹿らしくなってきたぜ」

そう言つて甲児は立ち上がった。

ズボンについた汚れを手で払い落としてスバルの方を向く。

「サンキューなスバル。お前結構良い奴じゃん」

「え？そ、そうですね／＼／」

真顔の甲児にそういわれたせいなのかスバルは顔を少し赤く染めた。そんなスバルを見てると年相応の可愛さが見える。うーん、若いつて良いもんだなあ。

等とこちらは爺臭い事を思っているのだが。

「もう、甲児くんつたら鼻の下伸ばし過ぎじゃないの？」

「ええ！俺そんなに伸びてた？自覚なかったんだけど」

後ろからそう指摘されて甲児はギョツとした。

確かに鼻の下を伸ばした気はしてないのだ。

即ち自然にそうしてしまっただろう。

自分の体ながら何とも不自由な事である。

ふと見るとスバルがそんな二人を見て笑っていた。

「何が可笑しいんだ？」

「あ、御免なさい。何だか甲児さんとさやかさんを見てるととても仲良いんだなあ……って思えまして」

「え／＼／」

「あはは、そうかい？いやあ参ったなあ」

スバルの言葉にさやかは頬を赤く染めて甲児は頭を掻いて笑っていた。

すると先ほど歩き去って行った筈のティアナが不機嫌な顔をして戻ってきた。

かと思うとスバルに拳骨をかまして蹲ったスバルの襟首を引きずってそのまま去って行ったのだ。

やはりティアナは少し甲児達に距離を置いているようだ。

これから彼女と一緒に過ごすのかと思うと気が引ける思いがする。まあ年下なのだし大目に見てあげるしかないな。

と寛大に思う甲児ではあった。

「甲児さぁん！」

そんな考えを吹き飛ばすかの様に聞こえたのはエリオの声である。振り返ると手を振りながらこちらに向かって来ている。

勿論キヤロも一緒だ。

二人して手を握り合っている所を見ると案外仲が良いようだ。

「よ、相変わらず元気そうじゃねえか」

「はい、甲児さんもこれから僕達と一緒になんですよね」

「まあな、つつつても俺には魔力が無いから専ら対機鋼獣用になるのが主かもな」

甲児はそう呟いた。

確かに甲児には魔力が無い。

即ち他の魔道士の様に等身大の相手になれば魔道士の出番となるのだ。

逆に20mはある機鋼獣となった時には甲児の出番である。

甲児とマジンガーZがその機鋼獣を叩き潰している間に魔道士達が任務を達成するのだ。

そう言ったコンビネーションでこれからは動く事になった。

しかし其処でまた問題が浮上したのだ。

それは、マジンガーの『運搬方法』だ。

「スクランダーが無い以上地べたを走って行くしかないんだよね」

甲児は呟いた。

結局スクランダーは見つからず今のマジンガーには飛行能力が無い。その為スクランブルが掛かる度に一々聖王教会にまでマジンガーを取りに行かなければならないのだ。

これはハッキリ言っただけの口スになる。

その間に仲間達が機鋼獣に巻き込まれたらその時点でアウトなのだ。かと言ってメンバーを護送するへりに吊るして行くと言うのも無理な話だ。

1台のへりで20tはあるマジンガーを運ぶのは風船でコンクリートブロックを持ち上げる事と同じ位難しいのだ。

だが、幾ら悩んだって良い答えが出てくる可能性はゼロなのだ。仕方なく諦める事にした。

まあマジンガーの足でなら全力で走れば左程問題では無いだろうし。多少面倒だが我慢すれば良いのだから。

「そう言えば・・・」

甲児はふとエリオの隣に座っているキヤロを見た。

彼女は未だに押し黙ったままエリオに寄り添っている。

未だに言葉を発せられないでいるのだ。

「なあエリオ・・・一体どうしてキヤロは口が聞けないんだ？」

「よかつたら教えてくれない？」

甲児とさやかが尋ねた。

それを聞かれたエリオは渋った顔をした。

余り答えたくないのだろう。

そう思えたのだ。

しかし聞いてしまった以上は聞かねばならない。

半ば後悔しながらもエリオの口から出た言葉を甲児達は聞く。

「キヤロは元々『竜召還士』と呼ばれる部族の生まれだったんです。でも・・・その部族がある日、突然襲って来た機鋼獣の攻撃で皆殺しにされてしまったんです」

「な！」

「そんな事が！」

甲児とさやかは思わず声を挙げた。

隣に居たキャラは顔を沈める。

思い出してしまったのだろう。

あの時の辛い記憶を。

思い出したくも無い過去を。

「それで、最後に残ったキャラにも機鋼獣が迫ったんですけど。その際に彼女の中に眠っていたもう一体の竜がその機鋼獣を破壊したんです」

「機鋼獣を倒した！凄いなあ」

驚いた。

この世界に機鋼獣に対抗出来る存在が居るとは。

そう思えたのだ。

驚き終わった甲児は再びエリオを見た。

エリオは続けた。

「ですが、その襲撃の後遺症でキャラは言葉が発せられなくなってしまったんです」

「可愛そうに・・・」

甲児とさやかか心底そう思えた。

こんな幼い少女にそんな辛い過去があったとは。

その時甲児は自身の境遇を思い出した。

両親がマジンガーの事故で行方不明になり、その際重傷を負いながらも生きていた祖父が甲児とシローを面倒見てくれたのだ。

だが、その祖父もDr・ヘルの手により死亡。

その後、奇跡的に生きていた父と再開出来たのも束の間、ミケーネ帝国の攻撃からグレート、剣鉄也を守る為に無敵要塞デモニカに特攻しその生涯を終えた。

そう、今の甲児には肉親が弟のシローしか居ないのだ。

そんな甲児にはキヤロの心境が痛い程分かった。

さやかも同じであつた。

自身がまだ幼い頃に母と死別したからだ。

大好きだった母と病気のせいで一生離れ離れにならなければならぬ辛いさを彼女も知っていたのだ。

そんな二人の前でキヤロは服を両手でギュツと握り締めながら押し黙っていた。

目からは涙は流れていない。

流そうと思えば流せるのだろうが流さないでいたのだ。

芯の強い子である。

「キヤロ・・・辛かったら、遠慮なく俺達を頼って良いんだぜ」

「・・・・・・・・」

甲児の言葉にキヤロは黙って甲児を見ていた。

そんなキヤロに甲児は続ける。

「ガキつてのは大人におんぶに抱っこされて大人になっていくんだ。

初めから大人なガキなんて居ないんだよ」

「・・・・・・・・（コクッ）」

その言葉にキヤロは頷いた。

まだ話せないらしく無言でもあつたが甲児の思いが伝わっただけでも甲児は嬉しく思えた。

「甲児さん、此処に居たんですね」

「ん？フェイトか」

見るとフェイトが甲児の元に近づいているのが分かった。

甲児は振り返る。

黒い執務官服を着た金色の長い髪印象を持つフェイトが甲児を呼んでいた。

「俺に何か用でもあるのか？」

「ええ、貴方を名指しで管理局が招集を掛けたんです」
「げっ！マジ！」

甲児は嫌な気分になった。

管理局と言えばマシンガーを接收しようとした組織だ。

機動六課の上に立つ位置らしいが甲児としては余り好きになれない組織でもある。

その組織の上の人間に直接呼ばれたのだから行かない訳にはいかないのだが、正直言って行きたくないと言うのが本音である。

「なあ、これってふけるのって駄目？」

「何言ってるんですか！そんな事したら機動六課を潰される危険性だつてあるですよ！」

「そ、そりゃやばいなあ・・・しゃあねえ。行きたくねえけど行くしかねえか」

深い、とても深い溜息をつきながら甲児はフェイトに付いて行く事にした。

「あれ？さやかさんは呼ばれて無いのか？」

「ええ、貴方だけよ」

「やっぱり私はロボットに乗ってないからかしら？」

「良いなあさやかさんは。どうせ管理局の上層部って言ったらきつと頭でつかちで髭面のオッサンなんだろうぜえ」
(あ・・・強ち間違ってないから否定出来ない)

内心フェイトは笑いを堪えていた。

目を覚ますと其処は見慣れぬ場所であった。
頭を擦りながらも彼は起き上がった。

此処は何処だ？俺は確か・・・

思い出そうとした矢先に、彼の前には1台のバイクが置かれていた。
それに跨る彼。

考えるのは苦手だ。まずは行動を起こすのみ。

そう思った彼はバイクのエンジンを掛ける。

「あゝあ、憂鬱だなあ」

「そ、そんなに嫌ですか？」

フェイトの運転する車の助手席で甲児はうな垂れていた。
今二人は管理局地上本部に向かって走っているのだ。
最も、甲児は余り乗り気ではないのが事実であったのだが。
何しろマジンガーZを甲児の手から奪おうとした連中だ。

仲良く出来ないと言う方が正しい。

そんな訳で甲児は今非常に乗り気じゃなかった。

「もうすぐ着きますからね」

「へいへい」

ぶつきらばうに甲児は答えた。

目の前に見えるのは巨大な建造物である。

周囲を水で囲まれた清楚な感じの建造物である。

あれが恐らく地上本部なのだろう。

甲児でも一目で分かった。

「ついちまつたか」

車から降りた甲児がぶつくさ呟きながら車から降りる。

最早来てしまった以上後戻りは出来ない。

こうなれば腹を括るしかない。

そう思っていた。

「こつちです」

フェイトについて甲児は歩く。

その途中で出会う局員達が甲児を見て驚きの目線を送る。

そりゃそうだ。今となつては兜甲児は質量兵器を扱う異端児として有名なのだ。

だが、それは良い意味ではなく悪い意味で、である。

やはりこの世界では質量兵器は禁忌であるらしく甲児を良い目で見
る者は少なかった。

居心地が悪い。

言ってしまうばそんな感じであつた。

まるで皆が自分を厄介者のように見ている感じだ。
そんな気分になった。

やがて、二人の前に一枚の扉が現れた。
近代的な作りのスライド式の扉だ。
フェイトがその扉を数回ノックする。

「入れ」

中から聞こえたのは男の声であつた。
それもあり年を行つた声である。

ああ、やっぱりオッサンかあ。

内心美人だと良いなあと言つた期待を膨らませていた甲児の淡い思
いは音を立てて崩れ落ちた。

そんな甲児を他所にフェイトが扉を開ける。

其処に居たのは文字通りの人物であつた。

強面で髭面のオッサンが其処に座っていた。

まさか此処まで予想通りとは思つても見なかつたのだ。

そう思いながらも二人は前に歩み寄る。

「フェイト・Ｔ・ハラOWN執務官。ご命令通り兜甲児一等陸士を
連れて参りました」

フェイトが敬礼のポーズを取りながら言う。

甲児もそれに答えるように。

「兜甲児一等陸士であります。用件はなんでしょうか？」

軽く敬礼のポーズを取りながら目の前の男性に尋ねる。

すると男性は自身の顔の前に両手を絡ませながら甲児を見た。
そして口を開く。

「兜甲児・・・君は異世界から来たと言うのは本当かね？」

「ええ、そうなります」

半ばぶつきらぼくに甲児は答えた。

それを聞いた男は肩眉を上げる。

隣ではフェイトが明らかに動揺を隠せない表情になっている。

「こ、甲児さん！」

「構わん、それよりもだ・・・テストロッサ執務官、済まないが席を外してくれないか？この青年と二人で話したい」

男の言葉にフェイトは頷き、静かに退室した。

部屋に残ったのは男と甲児の二人だけであった。

「改めて自己紹介が遅れたな。私はレジアス・ゲイズと言う。管理局中将をしている」

「へえ、結構や役職なんだなあ」

甲児が関心する。

それを気に掛ける事もなく男は続ける。

「単刀直入に言う・・・兜甲児、私の元に来ないか？」

「何？」

「お前程の力を持つ男をあんな辺境の部隊に置いておくのは勿体無い。それならば私直属の部下にならないか？破格の給料と階級を約束するが？」

男はそう言った。

要するに今の機動六課をやめてこの男の下につけと言う話なのだ。

普通なら美味しい話であろつ。

だが、甲児はそれに乗る気はサラサラ無かつた。

「折角だけど、俺はあんたの下につく気は無いよ」

「何だと？」

「この世界を守る為だつてんなら何処でも出来るしな、それに俺は階級も給料も要らない。皆の笑顔が守れるならそれで充分だ。それに・・・」

甲児は其処で一呼吸置く。

その目は先ほどとは一変して柔らかな顔に変わった。

「俺は機動六課が気に入ってるからな。何しろ美人が多いし」

結局がそれであつた。

何とも下らない理由ではあつた。

すると、男が肩を震わせていた。

怒っているのかと思つたが違つていた。

次の瞬間、レジアスは顔を上に向けて大声で笑い出したのだ。

「フッフ、やはりお前は大した男だよ兜甲児」

「何だ？そんなに褒めるなよ」

「フツ、正直先の話に貴様に乗った場合、即座に貴様を拘束してZを回収しようと思つたのだが、どうやらそれは稀有だったようだな」
「げっ！選ばなくて良かった」

心底危なかつたと思う甲児であつた。

「それで、兜甲児・・・お前を私は信頼しても良いんだな？」

「ああ、俺がマジンガーのパイロットである限り俺はこの世界を守

る為に力を貸してやるよ」

「知つての通りこのミッドチルダの約80%は機鋼獣に占領されている。私は一刻も早くこの状態を覆したいのだ。市民の安全の為に。その為には・・・」

「俺とマジンガーZの力が必要だって事だな」

結論なく甲児にレジアスは頷く。

「そんなのお安い御用だぜ！用があつたら何時でも呼んでくれ。マジンガーは平和の使者なんだ。悪党なんざ叩き潰してやるからよ」

甲児は輝く目で指を立ててそう言った。

上官を前にしても物怖じしない態度、それでいて熱意と闘志に満ち溢れた目をしている。

そんな甲児を一目見てレジアスは気に入ってしまったのだろう。気がつけば先ほどまでの険しい顔は何処にもなくお互いフリーに話し合っていた。

「頼もしい男だ、何時か貴様と腹を割って話してみたいものだ」

「おう、そんな時あ美味い酒と綺麗な姉ちゃん連れてきてくれよ」

「フン、尻の青い小僧の癖に言う事は一丁前な事を言うじゃないか。善処するでしょう」

「ヤッホウ！楽しみにしてるぜとつつあん！」

最早甲児にとってはレジアスは「とつつあん」と言う愛称で呼ばれるようになっていた。

そんな時であった。

デスクの横にある電話がけたたましい音を立てて鳴り出す。それを手に取り耳に当てる。

「私だ・・・そうか、もうそんな時間か」

数回頷いて受話器を置く。

「済まん、これから会議なのだ。話は以上だ」

「そうか、そんじゃ俺は帰らせてもらうぜ」

甲児はそう言つて部屋を出て行く。

そんな甲児を見てレジアスは笑っていた。

「あの小僧、良い目をしている。まるで昔の俺達の様だったな」

そう言つてレジアスは窓の外に映る空を見上げていた。

「なあ、お前もそう思つたろう?・・・ゼスト」

「お帰りなさい、甲児さん」

先に車に戻っていたフェイトが甲児にそう言った。
それに甲児が片手を挙げて答える。

「どんな話をしたの？」

「んあ？なあに只の世間話みたいなもんさ」

「????」

意味が分からず頭に？マークを浮かべるフェイト。

そんな時であった。彼女の乗っていた車に突如モニターが映し出された。

サウンドオンリーの為に映像は無かった。

『フェイト執務官！大変です、首都クラナガンの高速道路で謎の暴走バイクが出現しました。直ちに現場に急行して下さい』

「了解、直ちにそちらに向かいます」

「何だあ？暴走バイク？昼間っから乱暴な奴等も居るんだなあ」

甲児はそう呟いた。

「とにかく、すぐに向かいますから乗って下さい」

「あいよう」

頷き即座に甲児は乗り、車が勢いを挙げて走り出す。

連絡のあった現場には案外すぐに辿り着いた。

確かに目の前には一台の暴走バイクが走っている。

しかし、見た事の無い形のバイクであった。

大型バイク並の大きさなのだが何処かロボットの一部にも見える形ではあった。

「其処の暴走バイク、止まりなさい！貴方の行いは明らかな暴走行為ですよ！直ちに停止しなさい！」

フェイトがバイクを取ってバイクに向かって言う。

だが、暴走バイクは一向に減速する素振りなど見せずそのまま走っている。

それを見た甲児が業を煮やしてかマイクを取って叫んだ。

「おいてめえ！さつきから言ってるだろうが！止まりやがれこのオタンコナス！」

甲児が怒鳴る。

すると前を走っていたバイクが突如速度を落として二人の乗っていた車の横に位置する。
そしてこちらを見る。

「野郎！誰がオタンコナスだゴラァ！」

バイクの運転手らしき男がこちらを向いて叫んだ。

まだ少年であった。

年は１７歳位であろうか。

明らかに大型バイクを扱える年ではない。

「君、まだ子供でしょう！そんな大型バイクを扱える訳ないじゃない！」

「そうかあ？俺もアレぐらいの頃は平気で乗り回してたぜ」

横に居た甲児の言葉にフェイトは目を点にしていた。

すると少年が運転をしているフェイトを見る。

「うつひょお！すっげえ美人！しかもボインちゃん！」

「お、話分かるなあお前」

お互いフェイトが美人だと言うのは理解しているらしい。

が、今はそんな事を言い合っている場合じゃない。

「と、とにかく停止して下さい！貴方の行いは明らかに暴走行為なんですよ！」

「やなことだ！」

そう言う少年は突如バイクのスピードを挙げた。グングンと前を走っていく。かなりのスピードであった。

「おいどうするんだよ？このままだと見失うぜ」

「甲児さん、運転変わって！」

「なぬ！いきなり何する気だって・・・うおっ！」

甲児は驚いた、いきなり車の屋根が無くなりその上からフェイトが飛び出したのだ。

咄嗟に甲児が乗り移ってハンドルを握る。

すると、その上でフェイトは自身の姿をバリアジャケットで身を包み空を飛んで少年を追い出した。

「げえっ！何だこの姉ちゃん！空飛べるのか？」

「止むを得ません！実力行使に移ります！」

そう言うフェイトは自身のデバイス『バルディッシュ』を少年目掛けて振り下ろしてきた。

それを咄嗟に少年はかわす。

だが、その横には甲児の運転する車があった。

「げっ！」

「貰ったあ！」

甲児が少年目掛けて飛びかかった。

突然の事だったので少年は完全に対応が遅れた。

その為に甲児の接触を許してしまったのだ。

だが、高速で移動中にそんな事をしたらどうなるか、もうお分かりだろう。

「どわあああああああ！」

「うわあああああああ！」

もつれ合うようにバイクごと二人は派手にこけてしまった。

その際に車はフェイトが急ぎ戻り止めたので被害は無かったのだが。

「いてて・・・」

「畜生・・・なんてムチャしやがるんだ！」

起き上がった少年がそう言っただけで甲児を睨んだ。

「バーロイ！てめえこそあんな滅茶苦茶なスピード出しやがって！」

「んだとお！」

「やるかあ！」

「二人共落ち着いて下さい！」

喧嘩腰に言い合う二人をフェイトが止めに入る。

すると、その少年はフェイトを見た途端鼻の下を伸ばし出す。

「うおお！パツと見ただけでも分かったけど偉い美人だなあ・・・」

オマケにボインだし」

「ぼ・・・ボイン？」

「胸の事だよ」

「えええ！」

咄嗟に自身の胸を手で覆い隠す。
顔は真っ赤であった。

だが、それは返って彼を威嚇するような物でもあり・・・

「もう辛抱溜まらん！ぬおおおおお！」

と、まるで弾丸の如く少年はフェイトに飛びかかるうとした。
だが、それを甲児が止めに入る。

「てめえ！一人で何羨ましい事しようとしてんだゴラァ！」

「うつせえ！人の楽しみ邪魔しやがって！張り倒されてえのか？」

「上等じゃねえか！出来るもんならやってみやがれ！」

「んだとおこの野郎！」

こうなったら最早止める手立てなど無く二人は直ちに殴りあいに見
展してしまった。

お互い拳と拳の応酬を繰り返す。

それをフェイトは只見ているしか出来なかった。

何しろ止めようとしたらまた飛び掛られる恐れがあるからだ。

しかもアレ的な目的で。

そんな時であった。

「くおおおおおらああああああ！」

遙か後方から声がした。

今度は少女の声であった。

その少女が少年と同じ位の速度でバイクを走らせているのだ。
そしてそのままの勢いで少年に体当たりした。

「ぐえええばおお！」

体当たりを食らった少年がそのまま吹き飛ぶ。

かなり痛そう・・・ってか、普通なら死んでますって。

そして、それは甲児も同じであつた。

「甲児くん！」

「え？・・・えぎゃあ！」

同じようにバイクを走らせてやってきたさやかの体当たりを食らつて同様に吹き飛ぶ甲児。

そして倒れた甲児の襟首を引っ掛けてさやかが前後に揺さぶる。

「甲児くん！何フェイトちゃんに迷惑掛けてるの！帰りが遅いかと思つたらこんな事してえ！」

「ご、誤解だよおさやかさん！」

涙目になりながらも甲児が答えるがそんな事で納得するさやかではなく、更に激しく揺さぶる。

そしてそれはこちらでも同じであり。

「何すんだよつばき！痛いじゃねえか！」

「剣児！あんた人が居ないからって好き勝手やってんじゃないわよ！」

こちらでは更に酷く、抗議する少年に少女が何度も鉄拳を叩きつけていた。

かなり痛そうだ。

それを見ていたフェイトがどう止めたら良いか困っていた。

するとさやかと少女がフェイトの方を向くと。

「御免なさい！家の馬鹿が本当にすみません！」

と言って頭を下げるのであった。

「えっと・・・それで、貴方達は？」

「はい、私は『珠城つばき』って言います。ビルドベース所属のメンバーです」

「ビルドベース？聞いた事ないなあ」

「何だよ！お前そんな事も知らねえのか？時代遅れだなあ」

「てめえ・・・」

はやしたてる少年に甲児が睨みつける。

「よしなさいよ剣児」

「剣児？それが君の名前なの？」

「ああ、『草薙剣児』だ。鋼鉄ジークのパイロットをしてるぜ」

「鋼鉄ジーク？」

「何だ？ジークも知らないって一体どうなってんだ？」

剣児は仕切りに頭を傾げた。

彼等にとっては当たり前前の事をこいつらは知らないのだ。

「それじゃ聞くけど、お前等マジンガーZって知ってるか？」

「は？オジンガーZ？変な名前だなあ」

「オジンガーじゃねえ！マジンガーだ！」

「どっちだって良いじゃねえか？変わらねえだろう？」

「変わるだろうがボケェ！」

そう言って再び喧嘩腰になる。

懲りない二人である。

そんな中、フエイトはこう思っていた。

「つばきちゃんの声って・・・はやてに似てるなあ」

まああんまり関係無い話なのだが。

奪われたマジンガーZ（前書き）

お久しぶりです。

お待ちせして申し訳ありませんでした
ではどうぞ

奪われたマジンガーZ

草薙剣児と珠城つばき。

この二人が此処機動六課に来てから既に2週間は経っていた。その間も色々あったのだ。

まず剣児とつばきの身の振り方である。

本人達が言うにはこの二人も甲児と同じく巨大な質量兵器に乗っていたと言うのだが今はその質量兵器が無いのだ。従って今は只の人間でしかない。

かと言ってこのまま置いておくわけにもいかないのだ。

特に剣児に至っては最初の暴走行為から察するに放し飼いにしては一番いけない存在だと認識できた。

その為仕方なく此処に置いておく事が決定したのだ。

そして、その間甲児は散々な事があった。

「ふう」

部屋に置かれたソファーに座り一息入れる甲児。明らかに疲れ果てた表情である。

「結構疲れてるみたいですね、甲児さん」

それを見たエリオが呟く。

エリオだけじゃない。

キャロやスバル、ティアナ等新人の4人全員其処に居たのだ。

そして当然甲児の隣にはさやかが居た。

「全くだぜ。今日で一体何回目だ？背広の連中、面会時間とか分かってるのか？」

甲児が愚痴つてたのは背広の男達、即ち管理局の遣いである。内容は勿論『甲児の勧誘』と『マジンガーZの引渡し』であった。此処機動六課は言うなれば辺境の部隊なのだ。

その為管理局からも余り良い目では見られて居ない。

そんな場所によりにもよってあの様な巨人が配備されているのはかなり問題があった。

その為上層部としてはどうしてもマジンガーZを側に置いておきたかったのだ。

だが、機動六課に置かれている以上下手に手出しが出来ないのだ。次元世界の平和を守っている組織である以上法を破る事は出来ないのだ。

その為こうして地道に甲児を説得しようと言う腹なのだ。だが、その答えは毎度決まっただけの通り『NO』である。

「絶対マジンガーを兵器になんてさせるかよ」

甲児は断固として反対していた。

管理局の狙いは一目瞭然であった。

彼等の狙いはマジンガーを用いてミッドチルダに巣くっている機動獣軍団を一掃する事なのだ。

そして、それだけに留まらず、マジンガーを用いて管理局に背く犯罪者達を一掃する考えなのだ。

つまりマジンガーを兵器として利用しようとしているのだ。

そんな話はこっちから願ひ下げである。

マジンガーは兵器には絶対にしない。

それは甲児が決めた事なのだ。

「でも、マジンガーは兵器なんじゃないんですか？」

「それは違う！」

ティアナの呟きに甲児の声が強張る。

それと同時に甲児の顔も強張ったのに気づく。
ハッとした甲児が回りを見た。

其処には強張った甲児の顔に驚き固まってしまった四人であった。

「甲児君……」

「あ、ご……御免……強く言い過ぎた」

甲児はソファから立ち上がり、そのまま部屋を後にした。

「どうしたんだろう？ 甲児さん、さっきの凄い怖い顔だったけど……」

「僕にも分かりません。きっと甲児さんも疲れてるんですよ。管理局のマジンガー引渡し要求があんまりにもしつこいせいで……」

疑問に感じるスバルにエリオがそつと言う。
だが、ティアナはむっとした顔をしていた。

「質問だけであそこまで疲れるなんて……その甲児さんも精神的に案外大した人じゃないんですね」

「ティア！ その言い方……酷いよ！」

「何言ってるの？ 相手は只要求をしたただけなのよ？ それで疲れるなんてって言うって何が変なの？」

「ティア……最近のティア、少し変だよ？」

スバルが少し悲しそうな顔になって尋ねる。

目の前ではティアナの顔が終始不満げな顔になっていた。

「ティアナさん、一体どうしたんですか？ あの甲児さんの話題に

なる度に凄く不機嫌になつてますし・・・」

「気のせいよ・・・そろそろ部屋に戻るわ。デバイスの調整もあるし」

「あ、ティア！」

スバルの静止も聞かず、ティアナは部屋を後にした。

そんなティアナを見てスバル、エリオ、キャロの三名は疑問に思った。

「何だか・・・私達のせいで凄くギクシャクになっちゃったみたいね？」

「うっん、さやかさんや甲児さんのせいじゃありませんよ。でもティア・・・本当にどうしちゃったんだろう」

口ではそう言いながらも内心は相棒の身を案じるスバルなのであった。

「全く、あの男の頑固さには頭が痛いな」

背広の男の一人が呟く。

そう、今回も彼が甲児の元へ来たのだ。

内容は相変わらず『マジンガーZ引渡し』の交渉である。

だが、結果は相変わらず『NO』の一言に終わった。

「冗談ではない！ 現在どれ程あの機鋼獣に我等管理局が被害を受けているかなど、あんな若造には分かる筈がないのだ！ 何としてもあの巨人を・・・『マジンガー』を手に入れねば・・・最早手段は選んでられん」

何かを決意したかのように男は懷から携帯端末を取り出し慣れた手つきで操作を始める。
操作を終えるとそれを耳に近づける。

「私だ・・・例の計画を始動させる！・・・そうだ、もうマジンガーZを引き渡すなどと言う悠長な真似はやってられん、こうなれば実力行使に打ってでるまでだ！」

男が声を強めてそう言った後に、半ば強引に電源を切った。

「フッフ・・・小僧め、素直にあれを渡せば穏便に済んだ物の・・・せいぜい己の選んだ結果を恨むんだな」

一言呟き、男は笑みを浮かべた。

その笑みは何処か影のあるとても不気味な笑みであった。

場所は変わり、此処は聖王教会地下にあるマジンガーZの格納庫。
現在其処には数名のシスターがZの警護をしていた。

「シスターシャツハの命・・・とは言え、やはり私は納得がいかないわ」

その内の一人が忌々しげにZを見て呟いた。
やはり魔法が至上主義の世界に置いて全てが質量兵器で作られたZ

を置く事は彼女等の意に反する行為のようだ。
まして、その象徴とも言える聖王教会の中に置く事など以ての外なのだろう。

「こら、物騒な事を言うんじゃない！シスターシャツハに聞かれたらお叱りを受けるんだぞ！」

「だが、やはり私も反対だ。質量兵器のせいで一体どれ程の血が流されたと思ってるんだ？」

「だ、だが・・・我等はこれの警護を命じられて・・・」

シスター同士で激しい言い争いが起こり始めた。

忽ち激しい口論が勃発し、場の空気はどんどん険悪な物になっていく。

そんな時であつた。

「宜しいですか？」

「「「！！！！」」」

突如声がした。

おかしい。

本来この部屋へ入るにはシスターシャツハ、もしくは騎士カリムの許可が無ければ入る事は禁じられている。

にも関わらずシスター達の前には一人の背広の男、そして数名の魔道師が居た。

「な、何ですか！貴方達は？」

「なゝに、我々の目的は簡単な事だ。其処にあるマジンガーZを頂こうと思つてね」

男が笑いながら目の前にたたずむマジンガーを見る。

「くくく、生で見ると迫力がまた違う。これほどの素晴らしい兵器ミッドチルダでは作る事など出来ないな・・・正しく人類を救済する力だ」

「貴様！誰の許可を得て此処へ入ってきた！？」

「無論、私の許可を得てだ」

男はそう言って合図を送った。

すると後ろの魔道師達が一斉にデバイスを向ける。

それが何を意味するのか、シスター達には理解できた。

「下手な動きをすると蜂の巣になるぞ。こいつらの持っているデバイスには『非殺傷設定』は設定していない。即ち鉛弾と同じなのだ」

男が笑みを浮かべる。

それにシスター達の顔が強張る。

「おい、こいつらを拘束しておけ、万が一応援でも呼ばれると厄介だ。直ちに行動に移るぞ」

「はっ！」

男の命を受けて魔道師達はシスター達を拘束しその場に押し倒す。

その後、魔道師達は計器を操作し始める。

「ククク、神にも悪魔にもなれる存在・・・マジンガー・・・だが、お前がふさわしいのは人類の守護神などではない。お前がふさわしいのは『悪魔』だ！」

「き、貴様・・・一体マジンガーをどうするつもりなんだ！」

シスターの一人が男に尋ねる。

すると男がシスター達に向かって振り返る。

「教えてやろう。今日から人類の守護神マジンガーZは、我等『機鋼帝国』の忠実なる破壊の化身となるのだ！」

そう言つて男が身に付けている物を取り払つた。

その下から出てきたのは古代ローマ時代を思わせる鎧と兜を身に纏つた兵士であつた。

俗に言う『鉄仮面』である。

それは彼だけではない。

入つてきた魔道師全てがそうであつたのだ。

皆何時の間にか同じ鉄仮面の姿であつた。

「ま、まさか・・・お前達は、機鋼帝国の！」

「ククク、此処の奴らは皆このエリアには近づきたがらないらしいのでなあ、入り込むのは楽だったぞ。最も、あの五月蠅いシスターと騎士の目を盗んで入るのには苦労したがな」

鉄仮面が笑いながら言う。

やがて、マジンガーの周囲に防水ガラスが張られ、天井が開く。

するとその天井から夥しい量の水が吹き込んできた。

勿論防水ガラスのお陰で水がこちらまで迫つて来る事はない。

シスター達、そして鉄仮面達の見ている前で意思を持たないマジンガーZが徐々に外へと押し出されていく。

その光景を鉄仮面は笑みを浮かべながら見ているのであつた。

マジンガーZが湖の上から押し出される光景は騎士カリムとシスターシャツハの居る部屋からも確認する事が出来た。

「まさか！何故マジンガーが？出撃要請は出てないのに？」

「護衛のシスター達は一体どうしたの？」

カリムが不安を感じ通信を開いた。

だが、通信は通じないのか終始砂嵐になってるだけである。

「まさか・・・シャツハ！すぐに様子を見てきて！もしかしたら最悪の事態になるかもしれない。私ははやて達に連絡をとります」

「分かりました！」

カリムの命を受けシャツハが直ちにマジンガーZの格納庫へと向かい、カリムはすぐさまはやての居る機動六課へ連絡を試みた。

（マジンガーはその姿が表す通り質量兵器の塊。中にはあれの存在を認めない者達が多い・・・いいえ、この聖王教会に所属するシスターの殆どがそうと言い切れる。迂闊だったわ・・・こんな事態を想定していなかったなんて）

自身の甘さを後悔するカリム。

そう、この教会に属するシスターの殆どが質量兵器の存在を認めていないのだ。

従って、その様な者達が此処にマジンガーを置く事を良しとする筈がない事など初めからわかっていた筈だったのだ。

しかしカリムは其処への注意点が抜けていた。
その為にこの様な事態を招いてしまったのだ。

「お願い、間に合って！」

祈る様にカリムは通信モニターを開く。

そのモニターの前に映ったのは何時もどおりの笑顔で出迎えてくれた八神はやてであった。

カリムがマジンガーZの格納庫に来た時、その時には全てが終了していた。

マジンガーは既に地上に完全に出されており、今兵士達は撤退しようとしていた所だったのだ。

「貴様等！こんな所で何をしている？」

「ちっ、厄介な奴に見つかったな」

鉄仮面のリーダーがシャツハの姿を見て舌打ちをする。
すると続々と鉄仮面達が集まってくる。

「し、シスターシャツハ・・・」

「貴方達！大丈夫ですか？」

「は、はい・・・申し訳ありません。私達のせいで・・・マジンガーが・・・」

シスター達は己のふがいなさを悔やんだ。

だが、今はそんな事を悔いてる場合ではない。

目の前には総勢で10人前後の鉄仮面達が長剣を片手にシャツハ目

掛けて迫ってきているのだ。

「ヴィンデルシャフト！」

デバイスを起動させ、騎士甲冑となったシャツハがそれを迎え撃つ。迫り来る鉄仮面達を一人、また一人と薙ぎ倒していくシャツハ。

やがて目の前には先ほどのリーダー格一人が立っている所であった。

「貴方が最後ですね？警告します。直ちにマジンガーを格納しなさい！でなければ、貴方を・・・」

「ククク、どうするのだ？殺すのか？」

リーダー格が笑いながらシャツハに尋ねる。

言いたくないが実はその通りだ。

相手は間違はなく機鋼帝国の者だ。

下手な同情はこちらの首を絞める行為となる。

だが、その時であった。

突如リーダー格の男がその鉄の仮面を取り払った。

その中から出てきたのはおぞましい光景であった。

脳だ。人の脳が露出して出ているのだ。

脳の周りには拘束具が取り付けられており血管の変わりに銅線が打ち込まれており、眼球は半分以上が飛び出している。

余りの醜悪な光景にシャツハは思わず吐き気を感じた。

「クククク、恐ろしいか？元々我等は貴様等と同じ人間だったのだ。だが、機鋼王様のお力のお陰でこうして素晴らしいお力を頂いた。素晴らしいぞ。何しろ自分で考える事をしなくて良いのだから楽なものだ」

「それでは、まるで家畜か奴隷ではないですか！」

「その通り。我々は機鋼王様の忠実な奴隷。機鋼王様の命令なら我

等は喜んで死ぬる。我等は死など恐れん。さあ殺したければ殺せ。私のこの首を掻き切れば私は死ぬぞ？赤い血を流して死ぬぞ？さあどうした？殺せ！殺せえ！」

「う．．．ぐ．．．」

シャツハは戸惑った。

いかに相手は既に死人とは言え元は人なのだ。

教会に所属するシスターとして無益な殺生は出来ない。

そんな思いがシャツハの手を鈍らせたのだ。

例え、目の前に居るのが敵だとしても、例え既に相手が死人だったとしても、殺しは出来ない。

そんな思いがシャツハの行動をほんの少し鈍らせたのだ。

だが、それが命取りであつた。

「馬鹿め！」

リーダー格の男が笑みを浮かべ持っていた剣をそのまま投げつけた。ハッとしたときには既に遅かった。

投げつけられた剣はそのままシャツハの右肩を貫き深く突き刺さった。

刺さった箇所から赤い血が夥しく流れる。

「ぐあ．．．」

強烈な痛み思わず肩膝を尽く。

痛みで意識が飛びそうになるのを必死に堪えながらシャツハはリーダー格の男を見た。

すると男は何を血迷ったのか懷に持っていた銃を自身の脳に押し当てていた。

「我々の役目はこれまでだ。後は命令のまま実行するのみ……機鋼帝国……万歳！」

そう言い残し、男は引き金を引いた。

銃口から螺旋を描きながら鉛球が放たれる。

その弾は情け容赦なく男の脳を吹き飛ばした。

肉片と血飛沫が部屋を汚す。

やがて男は系の切れた人形のようにその場に崩れ落ちた。

壮絶な、余りにも壮絶な光景であった。

「何と惨い……私達が闘っている相手は……私達の常識を遥かに超えている」

余りにも残虐で余りにも非道な行い。

そんな敵の行いにシャッハは恐怖すら感じた。

だが、その時であった。

突如辺りを激しい振動が揺らした。

それは地上であった。

地上に飛び出したマシンガーを数機の奇妙な機械が持ち上げていたのだ。

大きさは3～5mはある。

丸い球体状の機械で体から無数のコードを放ちマシンガーに取り付けて上空に持ち上げている。

その光景をカリムは見ていた。

カリムの顔に絶望が浮かんだ。

「ま、間に合わなかった……」

ガクリと頂垂れるカリム。

彼女の目の前には一つの結末が描かれていたのだ。

マジンガーズが奪われた……と言つ最悪の結末が……。

奪われたマジンガーZ（後書き）

次回は起動六課メンバーによるマジンガーZ奪還作戦。
原作で言う例のあのシーンに入ります
お楽しみに

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0605t/>

魔法少女リリカルなのはDYNAMIC リメイク

2011年12月2日20時49分発行